とある魔術のなのはFORCE　～12の魔法～

六甲水

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
とある魔術のなのはＦＯＲＣＥ　～１２の魔法～

【Ｎコード】
Ｎ９５１４Ｏ

【作者名】
六甲水

【あらすじ】
オルドレイク事件から六年後、世界は片時の平和の中にあり、だが、そのトーマはディバイダーの力を得てしまい、世界は混沌に落ちる。その中、もう一人の少年がいたそれは………、とある魔術のなのはの続編＋オリジナルの話です。まだ原作がまだ連載途中なので、更新が遅くなったりするかも。

プロローグ

オルドレイクの事件から六年後の世界、人と魔導との出逢いは果たして幸福であったか否か
かつて世界に争いを起こしたのが巨大な魔導の力ならば、争いを止めたのもまた同じ魔導の力だった。
世界は片時の平和の中にあり、答えは未だに出ていない。

ルヴェラの文化保護区
そこの聖王教会の建物の中に一人の少年が手紙を出していた。その少年の名前はトーマ・アヴェニール。
シスター「はいはい、ミッドチルダ宛の電子絵葉書の送信ね」
トーマ「うぃっす」
シスター「旅行中？」
シスターはトーマの格好を見て言った。トーマは「はい」と答えた。
シスター「今日はどこまで行くの？」
トーマ「この先の鉱山遺跡に宝探しです」

また別の所では、
一人の少年が森の中で何体もの狼と戦っていた。髪はブルーで手には小さな指輪をしている。ソーガ
ソーガ「たく、トーマの奴と合流したいのに、何でこんな所で迷子に……」
狼は一斉に襲いかかってきた。だが、ソーガの横を通り過ぎた瞬間、体が爆ぜた。
ソーガ「たく、力量ぐらいしっかり見ろよ」

ギル『それは無理な話では？あれぐらいの生命体に言葉を理解する知能はありません。』

銀色の指輪。ソーガのインテリジェントデバイス・ギルはソーガに話しかける。

ソーガ「はぁ、何とか、合流しないと、」

少年の名前はソーガ・ベルリッツ。オルドレイクの息子だ。

この二人が紡ぐ物語は、そして、幻想殺しは………

キャラクター設定（前書き）

六甲水「オリジナルキャラクターのキャラ設定とです。ちなみに設定的には当麻の出番が少ない可能性があります」

キャラクター設定

ソーガ・ベルリッツ

オルドレイク・ベルリッツの息子。年齢１６歳　トーマがスバルと出会う前にティアナと出会い、ティアナの紹介で、スバルやなのはと知り合う。今はナカジマ家に保護されている。自分の父親のことは、当麻やスバルから聞いていて知っているが、母親のことや父親が何故あんなことをしたのか知るために旅をしている。トーマの事は弟だと思い大切にしている。睡眠を妨害されると怒る。使用魔法は召喚と装備など、かなり特殊である。

術式　近代ミッド式

髪の色　ブルー

瞳の色　金

使用魔法＋魔術

風切魔術
風を自由に操れる。鎌鼬など。術式はギルダーツに組み込んである

飛翔魔術
背中に白い翼を生やし、自由に飛行可能。術式はギルダーツに組み込んである

第１２宮魔法

１２星座をモチーフにした魔法。召喚と装備ができる。

白羊宮のウル

絶対なる守護を司る魔法。防御に特化している。装備形態　盾

金牛宮のタウロス

破壊力がもっとも高い魔法。強固に出来ている物を破壊するのに特化。装備形態　拳具（右手）

双児宮のツイン

炎の性質と水の性質を持っている。ソーガのお気に入りの一つ　装備形態　双剣

巨蟹宮のコーク

捕縛に特化した魔法　装備形態　ビット　肩　盾

獅子宮のレオル

全ての第１２宮魔法の中でトップクラスの魔法。装備形態　大剣

天秤宮のゾディ

相手の特性に合わせられる魔法。但し自分より弱い相手には使えな

い　装備形態　鎧

天蠍宮のスコル

毒を司る魔法。相手に毒を送ったり、毒に対する耐性がつく　装備形態　拳具（左）＋鞭

人馬宮のサタ

遠距離魔法に特化した魔法　狙った物を絶対外さない。双児宮との連携を主に使う　装備形態　弓

磨羯宮のキヨイ

広範囲魔法＋自動追尾に特化した魔法　獅子宮と同じトップクラスの魔法　装備形態　杖

宝瓶宮のベル

回復魔法に特化した魔法　死者を蘇させることは出来ないが、無くなった腕などを回復できる。装備形態はなく、人間形態がある。

双魚宮のリヴァイ

砲撃系に特化した魔法。威力が高い所為で使用者に反動が大きい。一発撃つ魔力も大きすぎて使い勝手が悪い。装備形態　バズーカ

フルセイバーモード

処女宮以外の十二宮の魔法を全て組み合わせたフォーム。発動時に

はバリアジャケットは騎士甲冑に変わる。その能力は絶大な能力である

フルセイバーパラディン

全十二宮の力を組み合わせたソーガの最強フォーム。その能力は最強に近く、全ての十二宮魔法を使用できるほどである。だが、長時間の使用で、ソーガ自身の魔力が空っぽになる。

デバイス

名前ギルダーツ

待機状態　指輪。

戦闘状態　槍と杖が混ざった物。第１２宮魔法と組み合わせることが可能。

詳細　なのはとスバルがソーガに合わせて作ってもらったインテリジェントデバイス。相手の情報などを検索できる。ソーガの良きパートナーの一人。魔術使用時のルーンの代わりを果たす。

処女宮のイリス

ユニゾンデバイス。デバイスだがあまりデバイス扱いされるのは嫌っている。だが、ソーガが人として扱ってくれるので、好意を持っている。優しい性格で、争いを好まない。だが、困っている人や傷

ついている人がいたら直ぐに手を差し伸べる。十二宮の中で唯一他の十二宮を使うことができる。さらにパラディンフォームの鍵となる。

髪の色　白

眼の色　赤

キャラクター設定（後書き）

六甲水「以上がキャラ紹介です。ちなみにソーガはかなり強い方ですが、魔力切れが激しいので、」

ソーガ０１　動き出した遺産（前書き）

六甲水「今回はソーガ視点でやります。その次ぐらいで、トーマ視点をやります。基本的に、上条さんはかなり出番が少ないです」

ソーガ０１　動き出した遺産

ソーガは森を抜け、ある集落にたどり着き、そこの人々に歓迎を受けていた。

「おぉ、森の狼をやっつけてくれましたか」

村長らしき老人がソーガの手を掴み、嬉しそうにしていた。するとソーガの元に駆け寄る一人の少女がいた。髪は真っ白で、腰まである長さの少女だ。

イリス「ソーガ、おかえり。どうだった？」

ソーガ「イリス。とりあえず、何とかなったけど、お前も連れていけばよかったかもな」

イリス「そうかな。ギルもお疲れ様。」

イリスはソーガがしている指輪型のデバイス。ギルに労いの言葉をやるとソーガはイリスと共に村を出ようとする。

「あの、御礼の方は？」

ソーガ「あぁ、この村に来たときに二日分の食料買ったから、特にいらない。」

イリス「それでは、みなさん。さようなら」

二人は村を出て、また森の中を進んでいった。

夜になり、森も抜け鉱山にたどり着いた。

ソーガ「とりあえず、ここら辺でキャンプでもするか」

イリス「そうだね。あれ？あそこ………」

二人でキャンプの準備をしているとイリスが鉱山の中にある物を見つけたそれは………

ソーガ「人だな。それもどっかの研究員だな。」

こんなところに何で………、気になり、とりあえず、イリスを置いて研究員のあとを追うことにした。

研究所

研究所の中は何かの人体実験の結果などのサンプルが置いてあったりした。

ソーガ（何で、こんな所で………何かあるな）

研究員の後を付けると、研究員は巨大な扉を開け、中に入っていった。とりあえず、扉の後ろに隠れて様子を見ると………その部屋の

中央に四つのフラスコが置いてあった。

研究員「フフ、これがあのオルドレイク・ベルリッツが残した研究成果、ついに私が完成させた。これで、憎き管理局に復讐が……」

ソーガ（ふーん、親父が残した研究か微妙に興味があるな。）

ソーガは首に下げたロケットの写真を見つめ、ギルに話しかけた。

ソーガ「ギル。行くぞ」

ギル「了解。ソーガ」

ソーガは部屋の中に入り、研究員と対峙する。

研究員「な、なんだお前は………まさか、管理局の人間か」

ソーガ「さぁ、どうだろうな。ギル、セットアップ」

ギル「イエス・マイロード」

ソーガとギルは光りに包まれるとバリアジャケットと戦闘形態になった。ギルは指輪から、金色の杖に変わり、ソーガは蒼いコートに身を包んだ。

研究員「き、き、き、貴様。死ね。」

研究員はソーガに向かって銃弾を放つと、ソーガはそれを避け、一気に距離を詰め、研究員を思いっきり殴った。

ソーガ「全然弱いな。」

ギル「まぁ、ただの研究員ですから、それで、この方をどうしますか？」

ソーガ「とりあえず、警備隊に連絡でもして、連れていってもらうか。」

ギル「ん、ソーガ、彼が」

気がつくと、研究員がフラスコの前に置いてある制御装置を弄っていた。

研究員「こ、このままじゃ、だが、こいつらさえ解き放てば………目覚めろ。神機人ども。」

研究員の呼びかけに応えるように、フラスコが四つともすべて割れ、出てきたのは、一人は、右腕が剣の腕をつけた銀髪の少年。左腕がマシンガンの金色の青年。巨大な斧を背負った赤い髪の男。最後に白い刀を持った黒髪の少女の四人が出てきた。その一人である銀髪の少年が研究員を見た。

？？？「ねぇ、おじさんが僕らを復活させたの？」

研究員「あぁ、これからは私が君たちのマスターだ。」

？？？「ふーん、そうなんだ。へぇー、」

少年は剣で研究員の首を切り落とした。

？？？「おじさんじゃ、僕らのマスターにはふさわしくないよ。」
少年が無邪気に笑った。すると、黒髪の少女がソーガを見る。
？？？「あら、あなたの魔力。創造主様に似ているわね。」
ソーガ「創造主？俺の親父のことか？」
？？？「親父？なるほどね。あなたが息子ね。それでどうする？」
ソーガ「お前らみたいな危険な奴らを壊すに決まってるだろ」
？？？「あら、じゃあ、始めようかしら。」
少女から巨大な殺気を放つ。だが、金色の髪の青年が制した。
？？？「やめとけ。今の状態ではまだ完全ではない。とりあえず、拠点をつくろう。それからディバイダーをさがそう」
四人が魔力を放ちながら研究施設を飛び出して行った。
ソーガ「何なんだ？あいつらは……とりあえず、イリスと合流するか」
イリスと合流するとイリスは慌てふためいていた。
ソーガ「どうしたんだ？イリス」

イリス「あ、ソーガ。何かさっき東のほうに巨大な魔砲が出てきて、そしたら、ソーガが入った研究施設から四つの閃光が出てきたりして、びっくりしたよ」

四つの閃光はあの四人として、巨大な魔砲か。何があるんだ一体

ソーガ０２　水の神機人（前書き）

六甲水「今回はソーガ編です」

ソーガ「トーマの話はいつやるんだよ？」

トーマ「いい加減出番が欲しいです」

六甲水「次ぐらいにトーマとリリィの出逢いはやるよ」

トーマ「ならいいですけど、今回は？」

六甲水「神機人の一人と戦いよ」

ソーガ０２　水の神機人

ソーガとイリスは巨大な魔砲が放たれた場所に向かっていた。

ソーガ「たくっ、面倒なことになってるな」

イリス「面倒な事って、いまいち状況が理解できてないんだけど、」

ソーガ「そうだな。」

ソーガは走りながら、研究所で起きたことを話した。父親が残した遺産のことや神機人のことを………

説明していると巨大な魔砲が放たれた場所にたどり着いた。そこはどこかの遺跡だった。中心部には大きな穴が空いていた。

ソーガ「どうやら魔砲を放った奴はもう逃げたか？」

イリス「分かるの？」

ソーガ「ある程度の残留した魔力は感じられるけど、この魔力の感じ………少し変わってるけど、あいつだよな。」

イリス「あいつ？」

ソーガ「………いや、なんでもない。もうここにいる理由はないな。近くの街に行くぞ」

イリス「うん。」

二人は遺跡から離れようとした瞬間、いきなり水の柱が襲いかかってきた。

イリス「これは………」

ソーガ「どうやら管理局とかじゃないみたいだな」

ソーガの目の前に現れたのは、白い刀を持った一人の少女がいた。

???「あら、あなたはさっきの………息子ね。こんな所に何か用なのかしら？」

ソーガ「お前こそ、この場所になんの用だ？」

???「面倒なことが起きる前に調べ事よ。どうやらディバイダーは既に無くなってたけど、」

ソーガ（ディバイダー？一体何を探してるんだ？）

さっきの研究所でも同じ事を聞いたが、何を話しているのか分からない。古代の武器なのか？それとも特殊な力のことを言ってるのか………だが、はっきり分かっていることがある。それは………こいつらを野放しにしておくと後々面倒なことになるということだ。

ソーガ「ギル、戦闘形態」

ギル「了解。」

ソーガはバリアジャケットに着替え、杖を少女に向けた。

???「あら、私を逃さないみたいね。そうよね。色々と聞き出したいことがあるみたいだし、いいわ。相手になってあげる。」

少女は白い刀を抜き、ソーガに斬りかかった。ソーガはイリスを後ろに下がらせ、杖で攻撃を防いだ

???「やるわね。これでも仲間のうちではかなり早い太刀筋なんだけど、」

ソーガ「はん、俺の知り合いに比べたら、遅いほうだぜ。」

ソーガは少女の腹に蹴りを放つ。だが、少女は食らう前に後ろに下がり、水の柱を放った。

ソーガ「ぐうう、水の魔法か。」

???「水の魔法?半分正解だけど、半分不正解よ。『アイシクル・ニードル』」

少女は刀を上に振りかぶると同時に氷の刃が現れ、ソーガに襲いかかった。ソーガは氷の刃を避けようとしたが、右肩に突き刺さった。

イリス「氷まで操るの?」

???「それもちょっと違うわ。『ミスト・ハンド』」

イリスの横から白い手が現れ、イリスを吹き飛ばされた。

ソーガ「イリス！！。お前、何しやがった。」

？？？「水蒸気を操っただけよ。まぁ、その子を殴る瞬間、固体にしただけ、私の魔法は、水を液体、固体、気体にする魔法。私は水の神機人　アイリス。あなたに追いかけられるのは面倒だから、ここで死んでもらうわよ」

ソーガ「何つう魔法だよ。だけどな、俺も見せてやるよ。魔法を……二極の星よ、一つは炎、一つは水、彼者を切り裂く刃となれ、双児宮のツイン」

ソーガの前に二人の少女が現れた。一人はショートヘアーで、髪の色は赤の少女。もう一人はロングヘアーで、髪の色は青の少女。

フレア「あら、久しぶりの召喚ね。ミセス」

ミセス「そうね。フレア。マスター、今回はあのふざけた女を倒せばいいの？」

ソーガ「あぁ、行くぜ。武装形態」

二人の少女は赤と青の光りに包まれたと思うと、二つの剣に変わった。一つは鋭く尖った青い剣と歪な形をした赤い剣に変わり、ソーガは二つ握った。

アイリス「二刀流。それに変わった魔法ね。いいわ、行くわよ。『ブルー・アクア』」

アイリスは水の柱をソーガの目の前に出す。だが、ソーガは青い剣

で水の柱を切ると、水の柱は消えていった。

アイリス「『ブルー・アクア』を破ったの？」

ミセス『甘いわね。水の力の前で水を使うなんて……』

アイリス「なら、『アイシクル・ニードル』」

氷の刃を放つが、ソーガは赤い剣を振ると炎の柱が現れ、氷を溶かした。

フレア『氷なんて脆いものなんて、私の前では無効よ』

アイリス「それなら、『ミスト・ハンド』」

白い霧の拳がソーガに襲いかかるが、ソーガは二つの剣を同時に振ると、白い霧は霧散した。

ソーガ「残念だが、双児宮は空気の力を持ってる。二つで一つの魔法だ。お前には天敵だな。」

ソーガは剣をアイリスに向ける。だが、アイリスは不敵に笑っていた。

アイリス「そうね、弱い魔法ではここまでね。今回は引いてあげる。でも、次はきっちり相手してあげる」

アイリスは白い霧に包まれ、姿を消した。ソーガはツインの武装形態を解き、イリスに寄り添った。

ソーガ「大丈夫か？」

イリス「う、うん。大丈夫」

フレア「やっほ〜、イリス。久しぶり」

ミセス「ボロボロね。宝瓶宮のベルに回復を頼んだら？」

二人は心配そうにイリスに言うが、イリスは首を横に振った。

イリス「ごめんなさい。私なら大丈夫だから、あんまりみんなに迷惑は掛けたくないの」

フレア「もしかして、まだあのことを気にしてるの？大丈夫だよ。双魚宮のリヴァイはもう怒ってないから」

イリス「ううん、本当に大丈夫だから。」

ミセス「ならいいけど、帰るわよ。フレア」

フレア「うん。」

二人の姿が消え、ソーガはバリアジャケットを脱ぐと、イリスを背負った。

ソーガ「とりあえず、近くの街に行って休もうぜ」

イリス「うん。」

ソーガ（神機人。あいつらなら、俺の親父の事や母親のことを知ってるはずだ。何とか聞き出さないと……それに、残留した魔力……
…あれはトーマだよな。）

ソーガ０２　水の神機人（後書き）

六甲水「ソーガの初戦闘。どうだった？」
ソーガ「まさか、いきなり幹部クラスと戦うなんてな。」
トーマ「それに、召喚した人たちも結構色々とあるみたいだね」
六甲水「イリスの過去についてはまた後でやるよ。」
ソーガ「それより、次回は？」
六甲水「次回はトーマ視点をやるよ。時間的には、ソーガが研究所に侵入した時間だね。」
ソーガ「そういえば、トーマと合流予定は？」
六甲水「それは秘密だよ。すれ違ったとかはやるかもしれないけど、」
「」

トーマ01　出会い（前書き）

六甲水「今回は、トーマ視点で進みます」

トーマ「更新遅かったですね」

六甲水「まぁね。今回はやっと原作主人公のトーマが活躍します」

ソーガ「頑張れよ。トーマ」

トーマ「うん、兄さん」

トーマ01　出会い

ソーガとイリスがある遺跡にたどり着いていた頃、トーマと相棒のスティードは目的地である。ルヴェラ鉱山遺跡にたどり着いていた。

スティード『お目当てのルヴェラ鉱山遺跡ですね。』

トーマの首にぶら下がっているデバイスのスティードが言った。トーマは遺跡を眺めながら答え、スティードが野営をしないかと提案し、トーマは野営の準備をしようとした瞬間、

トーマ「……先客かな？今、明かりが見えたような」

トーマは気になり、遺跡に近づいていった。だが、その行為がトーマの運命を変えることとなるとはこの時、思っていなかった。

遺跡の周辺には何十人もの警備員とどこかの研究員が何かの機材をトラックに詰め込んでいた。

「機材とデータの搬出は終了です」

白衣を来た女性が一番偉いと思われる男に報告していた。

「あとはマテリアルですが」

「廃棄処分だ。ここに捨ていく」

「献体はともかくシュトロゼックもですか？」

「出来損ない一基にいつまでも関わっておれんよ」

男はそう言って、手に持っているケースに入ったとある本を見ながらさらに続けた。

「向こうで、銀十字1（こいつ）の保有者を書き換えればすむ。それより、あの男はどうした？まだ研究途中である神機人の所か？」

「はい、まだやるべきことがあるそうです」

その様子を、トーマはスティードを通して見ていた。

スティード『引越しにしては物騒ですね』

トーマ「関わり合って、得はねーな。このままこっそりと…」

その時、トーマに念話が流れこんできた。

「痛イよ。苦シいヨ。」

トーマ「あ、つぅ！！」

その念話は、頭の中に直接響き様な感じで、トーマは苦しくなり、倒れこんだ。

スティード『トーマ！？』

トーマ「この声、念話…！？」

スティード『私には何も』

トーマ「あの奥……助けてって言ってる」

スティード『まさか、トーマ』

トーマ「助けてって言ってる」

トーマは遺跡の中に忍びこみ、奥のほうに進むと、そこには巨大なフラスコが何個も並んでいる部屋にたどり着いた。

トーマ「ここ、研究施設」

スティード『それも、ヤバそうな方向で』

スティードはフラスコの中にあるものをのぞき込みながら言った。フラスコの中には人の脳みたいなものが浮かんでいた。トーマは聞こえている声のもとへと急いだ。そして、声の主がいる部屋の前に行き……

トーマ「今、助けてあげるから……解け」

トーマは魔方陣を展開し、扉のロックを外し、中に入ると、そこには巨大な台に拘束された裸の少女がいた。さらに、トーマの左目が

激しい痛みに襲われた。さらに、右手にリングが現れた。

外にいた研究員も侵入された事に気がつき、激しいアラームが鳴った。

「侵入者！！」

「何者かがシュトロゼックに接触。」

「それにこれは、リアクト反応」

「主任、神機人の研究所からも非常事態が」

トーマは激しい痛みの中、何とか立ち上がり、少女に言った。

トーマ「大丈夫。俺がいますぐ、助けるから」

トーマの言葉を聞くと、少女はさっきまで悲しい表情をしていたのが、直ぐに変わっていった。トーマは少女の拘束を魔法で解除し、少女を救出した。だが、少女を拘束していた台座にひびが入り、トーマは何とか、少女を助け、抱き抱えるが……

トーマ「いてて、大丈夫。全裸！！」

スティード「なにか着るものを探します」

「失態だ。シュトロゼックやそして、神機人まで……安置室を焼却処分。シュトロゼックと侵入者ごとだ」

トーマは少女に服を着替えさせると、部屋全体にアラームが鳴り響き、警告が聞こえた。

【警告、警告、感染災害の危険発生。これより、熱焼却処分を行います】

トーマ「焼却だって、」

スティード『まずいですね。暑いのは苦手です』

トーマ「手伝え、スティード」

スティード『オーライ。トーマ』

トーマとスティードはプロテクションを発動させ、防ごうとしたが、焼却のカウントダウンが迫ってきた。

トーマ「いきなり、飛び込んできてこんなことになっちゃって、本当にごめんな」

トーマは少女に話掛けた。少女は心配そうにしていたが、トーマは笑顔でこう言った

トーマ「でも、大丈夫。きっと助けるから」
少女はトーマの顔を見て、何かを決意し、トーマの右手首に触れた。
少女(エンゲージ)

外で様子を見ていた研究員たちは、あることに気がついた。それは、さっきまで持っていた銀十字の本がなくなっていることに、そして、映しだされた映像を見ると、そこには……銀色の髪に、近くには銀十字の本、そして、手には刃がついた銃をもつトーマが映しだされていた。

ディバイダー『Ecディバイダー　CODE－996。Start UP』
トーマ「ディバイド・ゼロ」
銃から巨大な魔砲が放たれ、遺跡をぶち抜いたのだった。

「それが、さっき起こったことだ。いいだろうもう」
ソーガはアイリスとの戦いのあと、見つけた研究員を捕まえ、何が

あったのか聞いていた。

ソーガ「まぁ、十分だ。その侵入者の映像とか残ってない？」

「すまないが、あの時の衝撃で消えてしまったが……侵入者の特徴は覚えている。」

ソーガは研究員から侵入者の人相を聞き、待たせているイリスのもとに向かった。

イリス「どうだったの？」

ソーガ「やっぱりだ。あのバカ。余計なことに巻き込まれやがって……トーマを追うぞ。」

イリス「うん、それより、管理局の人があとで来るんだよね。何か伝言残さなくていいの？」

ソーガ「もう残したから大丈夫だよ。」

トーマ０１　出会い（後書き）

六甲水「二人のプロローグ的なものは終わったね。」
ソーガ「俺は、親父が作った神機人について、」
トーマ「俺は、ディバイダーとリリィについて」
六甲水「ということで、予告的なものをやります」

二人の少年は、奇妙な出来事に巻き込まれていった。

「この子の服と靴を探してるんだけど、」
「ここにトーマがいるんだな」
「きれーな腕輪。これ純銀？」
「この感じ、本当に何かがいます」
「貴様はこの俺が潰す。そして、ディバイダーを見つける」
「お前に何が出来るんだよ。くそったれ、」
「うわ、もしかして、兄さん。何でぼろぼろなのさ」
「この愚弟があああああああああああああああ」

ソーガとトーマは再会を果たしたとき、物語は揺れ動く。

ソーガ０３　二人目の神機人（前書き）

六甲水「今回から新章に突入します。」

ソーガ「今回は俺がメインなのか？」

六甲水「一応ね」

ソーガ０３　二人目の神機人

ルヴェラ鉱山遺跡の事件から数日後、俺とイリスはそこからそう遠くない港町に訪れた。

ソーガ「ここにトーマがいるんだな」

イリス「うん、多分だけど、その遺跡からどっか行くなら誰かと連絡がとれるこの港町だと思うけど……」

ソーガ「とはいえ、こんな街にそんな物があるはずないだろ。トーマの事だからきっと、連れだした誰かの服とかを買うためにここに寄ったんだと思うぞ？」

イリス「連れだした？トーマはスティードと二人で旅してるんじゃないの？」

イリスの質問にソーガはある写真を見せて答えた。

ソーガ「あの遺跡には人体実験していた形跡があったんだ。だから、多分だけどもう一人、居るはずだ。」

イリス「そうなんだ。それじゃあ、はや……」

ぐぅ～とイリスのお腹から聞こえた。イリスはとっさにお腹を隠したが、ソーガにばっちり聞こえていた。

ソーガ「まずは、なにか食べるか」

イリス「そうだね。」

ある遺跡に、四人の影があった。一つの影の正体はアイリスだった。

アイリス「全く、遊びのつもりがまさかあんな風になるなんてね」

アイリスは刀の手入れをしながら、残りの三人に言った。答えたの銀髪の少年だった。

???「あはははは、油断していたせいでこっぴどくやられちゃったんだよね。」

アイリス「あら、レル。あなた、私にそんな口を聞いていいのかしら?昔、マスターに喧嘩を売って真っ先に負けたのはあなたじゃない」

レル「ふーん、アイリスもそんな口を聞いていいんだ。僕は君より上位個体なのに……」

アイリス「残念ね。私のほうが上よ」

レル「なら、やってみる?」

アイリス「いいわね。口の聞き方を教えてあげる。」

レルとアイリスはお互いに武器を取り出し、今にもぶつかり合いが始まりそうになっていたが……

？？？「やめろ。貴様らが本気で戦ったら、せっかく見つけた拠点が壊れる」

二人の喧嘩を制止したのは、金髪の青年だった。アイリスとレルはしぶしぶと武器をしまった。

アイリス「悪かったわ。ヴィクサー。」

レル「そうだね。こんなケンカする前に早くヴィクサーの武器を見つけないと……ずっとそんな銃じゃ可哀想だもんね」

ヴィクサー「別に私の武器は見つけなくても良い。この銃で十分だ。」

ヴィクサーは左腕をあげると、左腕がマシンガンに変わった。ヴィクサーはこの中で一番戦闘力が高いが、その戦闘力は半減している。

アイリス「そういえば、ベルドラスは？」

アイリスはいつの間にか居なくなっていた仲間の姿が見えないことに気がついた。

ヴィクサー「奴なら、アイリスを、お前を破った男とディバイダーを探しに行った。」

レル「いいの？アイツが戦うとどっかの街が消し飛ぶよ。」

ヴィクサー「安心しろ。奴が戦いを始めた瞬間、結界が発動するようにしてある。住みよい場所をなくすのは好まないからな。」

ルヴェラ港町

ソーガとイリスはしばらく情報を集めていたが、あまり成果がなく、噴水の近くにあるベンチで休憩していた。

ソーガ「たく、ここ広すぎだろ」

イリス「そうですね〜と言いたいですが、ミッドチルダの方がもっと広いと思いますよ」

ソーガ「そうかもな。もう宿見つけて、今日は寝るか」

イリス「寝るって。まだ夕方ですよ。まぁいいですけど、」

二人が立ち上がり、宿に向かおうとした瞬間、イリスはある気配を感じた

イリス「……何かがいます。」

ソーガ「ん？俺はなんにも感じなかったけど、」

イリス「ごめんなさい。私気になるので行ってきます」

イリスは荷物をソーガに預けて、そのまま走り去った。ソーガはとりあえず、追いかけることにした。

イリスは路地裏まで来たが、そこには何にもなかった。

イリス「気のせいだったのかな？だったらいいけど……」

イリスがホッとして、元の道に戻ろうと思い、振り返るとそこは別の場所になっていた。

イリス「えっ、」

ベルドラス「やっと、一人発見した。」

声が聞こえたと思った瞬間、上から赤い髪の男が降ってきた。そして、男は巨大な斧を構えて、イリスに向かって言った。

ベルドラス「ソーガという男じゃなかったが、丁度いい。お前を壊す」

イリス「あ、あなたは……まさか神機人」

ソーガ03　二人目の神機人（後書き）

六甲水「イリスのピンチにソーガは……」
ソーガ「次回は戦闘か？」
六甲水「そうだね。この戦いが終わったら、トーマ視点になるから」

ソーガ０４　大地の神機人（前書き）

今回は戦闘です。

ソーガ０４　大地の神機人

ベルドラスと遭遇したイリス。ベルドラスはイリスに向かって巨大な斧を振りかざした。イリスはその攻撃を避けた。

イリス（動きは遅いけど、威力はかなりヤバい。掠っても結構なダメージを食らうかも）

ベルドラス「お前、あの創造主の息子の付き人だな。お前を殺せば奴は来るはずだ。」

イリス「やっぱり、ソーガくん狙いか。」

ベルドラス「くらえ。地龍天神」

ベルドラスが斧を地面に突き刺した瞬間、イリスの周りの地面から地の龍が二匹現れ、襲いかかってきた。

イリス「あなたの属性は……地。だけど、私も負けない。」

イリスは手のひらに魔力弾を出すと、その魔力弾を地の龍に放つ。地の龍は二匹とも砕け散った。

イリス「貴方みたいな人。私だけで十分です」

イリスは誇らしげに言うが、ベルドラスは笑っていた。

ベルドラス「お前、俺が地の属性と言ったが、俺の魔法は違うな。俺の魔法は…………大地だ。」

そう言った瞬間、イリスの足場が突然沈んだ。イリスは下を見ると地面が泥になっていた。

イリス「まさか………地、泥、砂を操れるの！？でも、この程度の拘束なら………」

イリスが泥から抜けだそうとした瞬間、砂の刃がイリスの肩に刺さった。

イリス「くぅぅぅぅぅぅ」

ベルドラス「無駄だ。俺の魔法は大地があれば、あるほど、最強だ。さぁ、お前の断末魔で奴を呼び出せ。」

ベルドラスは巨大な岩を作り出すと、イリスが倒れる真上に移動させた。

イリス「はぁ、はぁ、あなたの言うとおりに叫ぶつもりはない。」

ベルドラス「なら、死ね。」

イリスの真上から巨大な岩が落ちてくる。だが、その岩はイリスには届かなかった。何故なら突然、岩が破壊されたのだから。そして、倒れるイリスを抱き起こしたのは、ソーガだった。

ソーガ「遅くなったな。イリス」

イリス「ソーガくん。ごめんなさい。私………」

ソーガ「少し休んでろ。後は……俺がやる。」
ソーガはベルドラスを睨んだ。ベルドラスは巨大な斧を振りかざし、ソーガに向かって攻撃をしたが、ソーガはその攻撃をギルダーツの槍で弾いた。
ベルドラス「何！？」
ソーガ「わりぃが、今は機嫌が悪いんだ。一撃で終わらせる。全てを穿つ人馬よ。我が力となり、奴を穿て、人馬宮サタ」
ソーガが呪文を唱えた瞬間、弓を持った少年と矢を背負った白い馬が現れた。
サタ「マスター、お呼びですね。おや、イリスがボロボロですが……あの斧を持った男がやったんですね」
ソーガ「あぁ、頼むぞ。サタ。」
サタ「えぇ、武装モード」
サタの姿が白い弓に、一緒にいた馬が矢に変わった。
ベルドラス「その程度の弓矢で俺を倒せるのか？」
ソーガ「全てを穿て、ブラストアロー」
放たれた矢は六色の光に変わり、ベルドラスの身体を貫いた。
ベルドラス「がああああああああああああ、まだだ。まだ、終

わって………」

ソーガ「いいか、イリスをここまでボロボロにしたんだ。死ね。」

再び、矢を装填させ、放つ体制に入ったソーガだが、突然、ベルドラスの姿が消えた。

ソーガ「逃げたか。とりあえず、かの者を癒せ。宝瓶宮のベル」

ベル「やぁ、マスター。どこか怪我したの？」

呪文を唱えると、水色の髪に、ツボを持った少女が現れた。

ソーガ「いや、イリスが怪我した」

ベル「おぉ、こりゃ、大変だ。マスター、ここはマスターが傷口をなめてあげれば………」

ソーガ「いいから早く治せ」

ベル「うぅ、ひどいな。マスター。ねぇ、イリスちゃん」

イリス「え、う、うん。まぁ、さすがに傷口を舐めるのは汚いから………」

イリスは顔を真赤にしていた。ベルはイリスの治療を終えると直ぐに消えた。

イリス「ごめんね。ソーガくん」

ソーガ「いいよ。早く。宿屋に戻ろうか。結界のせいで外はもう深夜だし、早く…………」

ソーガが元の道をもどろうとしたとき、走るトーマの姿を発見した。

ソーガ「やっと見つけた。あのバカ」

ソーガとイリスはさっさと宿屋の予約を取りやめ、トーマを追うのだった。

ソーガ０４　大地の神機人（後書き）

次回、ついに合流です

ソーガ&トーマ０１　合流した二人（前書き）

ついに、ソーガとトーマが合流です。

ソーガ&トーマ01　合流した二人

トーマとリリィの二人と街で出会ったリリィの服を仕立ててくれた旅の少女、アイシスの三人はルヴェラ丘陵地帯で野宿していた。

アイシス「ま、こーゆー野宿もたまになら楽しいよね。管理局との追いかけっこ込みっていうのも、また面白いし、それで、何で二人は追われてるの？」

アイシスは笑顔で言うと、リリィは精神感応で事情を説明している中、トーマは食事を作りながら考え事をしていた。

トーマ（スゥちゃんに事情を説明するとして、もしこの事を兄さんに知られたら………）

スティード（本来なら私たちに合流するという話をしていましたが、合流しそこねましたね）

トーマ（うん、きっと、スンゴイ探してるんだろうな）

トーマとスティードがそんな事を話していると、突然草むらから何かの気配を感じた。

トーマ「二人とも、下がって、誰か来る」

アイシス「えぇー、」

リリィ「………トーマ」

トーマは身構えると、草むらから出てきたのは…………ボロボロのソーガだった。隣にはイリスも一緒だった。

ソーガ「………やっと、やっと、見つけたぞ。バカ弟」

トーマ「に、兄さん！？何でこんな所に………」

ソーガ「とりあえず、ギル、ランスモード」

ソーガはギルダーツを槍に変え、トーマに襲いかかる。トーマはとっさにディバイダーを起動させ、ソーガの攻撃を防いだ。

ソーガ「………それは………」

トーマ「え、なにこれ？」

リリィ『トーマ、ブレードオフって言って』

トーマはリリィの言うとおりにディバイダーを解除させた。ソーガもギルを待機モードにした。

ソーガ「たくっ、何か面倒事に巻き込まれやがって、事情を話せ」

ソーガ「なるほどな、ディバイダーに、謎の研究所、本当に面倒事に巻き込まれてるな。」

トーマ「うん、とりあえず、スゥちゃんに頼もうかなって」

ソーガ「それが、いいかもな。あの人ならどうにかなるし、とりあえず、俺も色々と説明しなきゃいけないこともあるし、」

こうして、二人は合流したが、これから起こることに二人はまだ気がついていなかったのだった。

ソーガ&トーマ０１　合流した二人（後書き）

すいません、短めで、次回は教会での戦闘です。

ソーガ＆トーマ０２　襲撃の教会（前書き）

やっと魔術側の二人が登場です。

ソーガ&トーマ０２　襲撃の教会

トーマとソーガが再会していた頃、時空管理局艦船ヴォルフラムの執務室には、はやてとリインフォース、リインの三人の前に二人の男女がいた。

はやて「ちょうどいい時に来てくれたんやね。土御門さん、神裂さん。」

サングラスにアロハシャッツの少年、土御門とGパンにポニーテール、そして、腰には刀を持っている神裂がいた。

土御門「こっちも聖王教会に報告しに来たんだけどにゃ〜、こっちは面白い事件を追ってるみたいだぜ。ねーちん」

神裂「えぇ、フッケバイン。魔導殺しの異名を持つものですか。」

はやて「そや、ホンマは土御門さんたちを巻き込まみたくなかったんやけど、まだこっちもフッケバイン対策が出来てへんからな。」

リインフォース「協力をお願いしようとしていたのですが、本当にいい時に来てくれましたね」

とリインフォースは二人を見つめて言った。すると土御門がこう言ってきた。

土御門「魔導殺しか。果たしてかみやんの幻想殺しが効くかどうかだな」

はやて「異能の力やし、効くと思うんやけど……今回その上条さんがいいひんからなぁ」

土御門「ははっ、補習地獄をうけてるからな。」

リイン「大変ですね。上条さん。なのはさんも悲しんでましたし、」

オルドレイクとの戦いから数年が立ち、この時間に安定して時は、学園都市側の世界ではすでに3年が経ち、当麻達も大学生になっているが……当麻の不幸はまだ健在であり、魔術絡みに巻き込まれることもある。その結果、補習もありなのはとのデートの時間が削られている。

はやて「そやね。一時期平和な世界が続いていたんやけどな。まぁ、今回は上条さんの力を借りること出来へんからな。でも、三枚目の切り札が存在するからな」

そう言って、はやてはモニターに一人の少年の姿を映しだした。それは…………

そして、数日の日が経ち、トーマとソーガ達は教会の近くにきていた。

トーマ「見えた、見えた。」

ソーガ「長い道のりだったけど、意外と早く着いたな」

トーマ「そうだね。所で兄さん」

ソーガ「何だ？」

トーマはソーガに耳打ちをしてきた。イリスの事を見ながら、

トーマ「あのイリスって人って兄さんとどういう関係なの？」

ソーガ「ん、そうだな………何というかリリィと似たような感じだ。召喚獣1(あいつら)が探して欲し言っていうからな」

ソーガはそう言って、イリスの事を優しく見つめた。そんな時だったトーマとソーガが教会から匂ってくる物に気がついた。

ソーガ「トーマ」

トーマ「兄さん。スティード、三人を頼む。」

スティード「了解しました。」

ソーガとトーマの二人は急いで教会へと向かった。

二人が教会にたどり着くと、ソーガはトーマに支持した。

ソーガ「トーマは中。俺は外を見てくる」

トーマ「分かった。」

二人は別れた。ソーガは教会の裏へと向かったのだった。

ソーガ「焼けた後と少し香る血の匂いか。犯人は教会の中にいるかも知れないな。ギル」

ギル「はい、トーマは無事でしょうか？」

ソーガ「どうだろうな。未知の力を持ってるからな。急いで向かうか。」

ソーガは教会の中に向かおうとした瞬間、突然突風が襲ってきた。

ソーガ「これは………」

レル「あれ？ディバイダーの反応が二つあったから来てみたら………創造主の息子か。」

ソーガ「お前は………神機人か。」

ソーガの前に現れたのは、銀髪に右手が剣になった少年……レルだった。

レル「まぁ、ヴィクサーがうるさいからいい加減殺しとくか。ねぇ、創造主の息子」

ソーガ「俺の名前はソーガだ。覚えておけ。」

教会の中を探索していたトーマは教会の講堂に入るとそこには……
…黒いジャケットに左手首には藍色の羽の刺青、そして、その横にはトーマが持っている刀剣があった。

ヴァイロン「いいか坊主。てめぇが盗み出したディバイダーとリアクター両方をこちらに寄越せ。ガキのオモチャにゃ過ぎたものだ。死にたくなかった。さっさと寄越せ。」

トーマ（藍色の羽。俺がずっと探してた。）

今、二つの戦いが始まろうとしていた。それがプロローグの始まりだったのだった。

ソーガ０５　風の神機人（前書き）

今回はソーガｖｓレルの戦いです。いい加減海での戦いをやりたい。

ソーガ０５　風の神機人

教会の外で神機人の一人レルがソーガの前に立ちはだかった。

レル「さてと、どう遊ぼうかな？」

ソーガ「遊ぶ？まるで子供みたいだな。」

レル「うん、そうだよ。まぁ遊ぶ内容は………君をどう切り刻もうかって事だけどね」

レルは軽く右腕を振った瞬間、ソーガの左肩に切り傷が出来た。

ソーガ（何だ？切る動作も動く動作すら見えなかった。）

レル「あはは、驚いていているみたいだね。でもこのまま切り刻まれるのは嫌だろ。ヒントを出しながら遊んであげるよ。」

今度は両腕を振ると、ソーガの右肩と左足が切られ、血が吹き出した。ソーガは警戒をして後ろに下がろうとするが………何かにぶつかった。

ソーガ「なんだ？見えない壁が………」

レル「逃げ場はないよ。風塵風斬」

見えない刃がソーガの体を切り刻む。さすがのソーガも為す術が無かった。

ソーガ「つぅ、こりゃ、ちょっとキツイかもな。だけど、見えない刃なんて………それに傷つけられる瞬間の痛みさえない。………なるほどな。」

ソーガはレルの攻撃方法に気が付き、ギルを起動させた。

ギル『何か分かったんですか？』

ソーガ「あぁ、どうやら、俺と同系統の魔術だな。いや、アイツの場合は魔法か。」

レル「今更気がついたところで遅いんだよ。風塵風斬」

再び見えない刃を放つレル。だが、ソーガギルダーツを地面に突き刺し呪文を唱えた。

ソーガ「見えなき刃よ。疾きその動きでかの者を切り刻め。風切」

ソーガが呪文を唱えた瞬間、ソーガとレルの間に何かがぶつかる音が聞こえた。

レル「何！？」

ソーガ「お前はどうやら風の神機人か。さっきの攻撃はどうやら鎌鼬だな。同系統の技を持つ相手なんて初めてだから気がつかなかったけど………それももう見破ったぜ」

レル「へぇ～、さすがは創造主の子供だね。わざわざ手加減しぇやる必要はないみたいだね。だったら、今度はこれだ。」

レルは右手の剣に風を纏わせる。その剣でソーガに向かってきた。ソーガはとっさにギルダーツで攻撃を防ぐのだが、右手と左手が切り刻まれた。

ソーガ「つぅ、攻撃範囲が広い。」

レル「まだだよ。風塵風切掌」

左手に風を纏わせ、ソーガの水月に掌打を与えた。その瞬間、ソーガの体が切り刻まれる。

ソーガ「がはっ、」

レル「トドメ。ボルテッカーストーム」

雷と風を混ぜた砲撃がソーガを襲い、ソーガのいる場所が爆発し煙に包まれた。

レル「どうやら、これで決まりだね。これで邪魔者がいなくなるな。」

ソーガ「それはどうかな？」

煙の中からソーガの声が聞こえ、レルは驚いていた。確実に攻撃が直撃したはずだったのに、まだ生きているわけがないと……煙が晴れるとソーガの左腕に白い盾が装備されていた。

ソーガ「白羊宮のウル。絶対的の防御だ。次はこっちの番だ。全ての獣の王よ。その爪、その牙を剣に変え、我に与えよ。獅子宮のレオル」

ソーガの前に金髪長髪の男が現れ、男は金色の大剣に姿を変えた。
レオル『マスター、奴に一撃必殺の刃を』
ソーガ「あぁ、奥義、獅子咆哮斬！！」
金色の斬撃がレルの右腕を切り裂き、斬撃は獅子に変わり、レルの体を爪で切り裂いた。
レル「があああああああああああああああ、」
ソーガ「トドメだ。」
獅子が大きな口を開け、レルを喰らおうとした瞬間、獅子が何かにかき消された。そして、レルを抱き寄せる金髪の男がいた。
ソーガ「お前は……」
レル「ヴぃ、ヴィクサー」
ヴィクサー「無茶をするな。まだ不完全の復活だ。お前ら三人ではこいつに勝てない。勝てるとしたらこの俺だけだ。」
ソーガ「面白いことを言うじゃねぇか」
ヴィクサー「ソーガ・ベルリッツ。まだ貴様とは戦う時期ではない。いずれ相手してやる」
二人の神機人はそう言い残して、どこかへ消えていった。脅威を残

して…………

ソーガ０５　風の神機人（後書き）

次回はトーマ視点です。

トーマ02　エクリプス（前書き）

今回はトーマ視点でお送りします。

トーマ02　エクリプス

ソーガが神機人の一人レルと対峙していた同時刻、トーマは故郷を破壊した犯人らしき男と対峙していた。トーマはディバイダーを取り出し、ヴェイロンに向けた。

「聞きたいことがある。ここをこんな風にしたのとシスターたちを殺したのはお前か」

「あん？」

「7年前にヴァイゼン鉱山を壊したのもあんたか！？」

ヴェイロンは険しい表情を浮かべ、ディバイダーをトーマに向けた。

「てめぇな、質問してるのはこっちだ。死ねクソガキ」

ヴェイロンはトーマに向けて、エネルギー弾を放った。トーマは咄嗟にそれを避け、ヴェイロンに近づき斬りつけるが、ヴェイロンはそれを避け、トーマに銃身を向け、トーマもヴェイロンに銃身を向けた。

『シルバーバレット』

『フレシェット・シェル』

二人はほぼ同時にエネルギー弾を放った。講堂は煙に包まれしばらくしてから煙は晴れるとトーマは右腕を負傷するが、ヴェイロンはほぼ無傷だった。

「ハッハァ！！こいつァ面白ェ。ただのガキじゃねってか。聞かせてみなそいつを連中から盗んだ理由は何だ？」

「別に欲しくて盗んだわけじゃない。女の子を助けたらこいつが勝手についてきた。」

「女……？シュトロゼックの事か？」

「………そう名乗った。」

「クク………ハハハハ、そうかい、そうかい」

「何がおかしい！？」

「知らねェってのは面白ェもんだ。てめぇが手にしているそいつが一体どんなシロモノなのか。それも知らねぇでその部品を『助けた』！？ハハハハハハ、スゲェな！とんだバカガキだ！！」

トーマがそう答えた瞬間、ヴェイロンは笑い出した。トーマはヴェイロンの行動が全く分からなかった。そして思った。自分がリリィを助けたのが？シスターたちを殺したのもこんな風に笑いながら……あの日、自分の故郷を破壊した時も………

「俺は質問に答えた。今度はあんたが答えろ。7年前のヴァイゼン鉱山だ」

「聞こえねぇな。」

トーマは憤怒しながらヴァイロンに質問を投げつけるとヴァイロン

はエネルギー弾を放った。トーマがいた場所は煙に包まれるが……

「こんな炎と嵐で俺の故郷を壊したのはあんた達か」

トーマは怒りでバリアジャケットを装着し、ヴェイロンに向かっていった。

「聞きてぇか？　そうだろうな！」

教会の外で待機していたイリス、リリィ、アイシスだったが、トーマが戦闘を始めた頃にリリィが苦しみだし、銀十字が出現していた。

「この揺れトーマたち？」

「揺れは教会からです。きっと犯人と戦っているんじゃ………」

「ごめん、スティード、イリス。リリィをお願い。」

『はっ？』

「もしかして………」

「ちょっと私行ってくる。」

ヴァイロンとトーマの何度目かのぶつかり合い辺りは炎と煙で包まれていた。

「答えろ」

「一つ忘れてるぜ。人にモノを尋ねるときにはな。『おねがいします』だ。クソカスが」

ヴァイロンはトーマの右腕を金属の爪で掴んだ。

「『ナパームファング』」

金属の爪から火炎放射を近距離で放った。トーマは咄嗟に左腕で右腕を庇った。

「どーしたァ。もう終わりか！？」

「うおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお」

トーマはディバイダーにエネルギー弾を貯めた。

『シルバーハンマー』

銀色の砲撃がヴァイロンに向かって放たれた。ヴァイロンはその攻撃を防御せずに受けるのだが…………

「つまらねぇな。こっちは弾切れで、てめぇはもう限界か。」

ヴァイロンはほとんどダメージを追っておらず、トーマは満身創痍に近いものだった。

「おう、そこのメスガキ。こいつの連れか。」

ヴァイロンは崩れた瓦礫の裏にいるアイシスに声をかける。アイシスは素早くトーマの前に出た。

「ほぉ、なかなかの速さだな。もう弾切れでやる気なくしたが、素手でお前とならっ…………」

ヴァイロンがそう言いながらアイシスの前に出ようとした瞬間、突然ヴァイロンの目の前に大剣とソーガが現れた。

「悪いが、トーマとアイシスには触れさせないぜ。ヤンキー野郎。」

（この男。それにあの大剣は…………そうかカレンが探してたもう一つのモノか。）

ヴァイロンはそのまま後ろを振り向き、どこかへと行こうとした。

「そこのガキが目覚めたら伝えておけ。『命もディバイダーも今は預けておく。鉱山の事故の事は誰がやったか見当がつく。知りたきゃ、俺らのところへ来い。フッケバイン一族　ヴァイロンだ』」

ヴァイロンはそう言ってそのまま逃げ出そうとするが、ソーガがそれを呼び止めた。

「待て、」

「何だ。相手なら今度してやるよ。黄道十二宮魔法の使い手。」

「聞きたいことと伝えておくべきことがある。神機人ってなんだ？」

「神機人？さぁな。それが聞きたいことか？じゃあ、伝えることは？」

「神機人がディバイダーを狙ってる。それだけ、」

「はは、おもしれぇな。敵にそれを伝えるか？」

「何となくだ。」

こうして、教会での戦いが終わりを告げた。トーマはしばらくしてから目をさますのだが……高い熱を出し、寝こんでしまった。ソーガとアイシスは別々に行動し街に買出しへと向かった。それがソーガにとっては始まりの章から次の章に移る行動とは思ってもいなかった。

トーマ０２　エクリプス（後書き）

次回はシグナムが登場。さらに神機人のアイリスも登場です。

ソーガ&トーマ03　出現（前書き）

今回から新章スタートです。なんというかやっとここまで行けた気がしますね。今回はシグナムとアイリスが登場します。

ソーガ&トーマ03　出現

教会での戦いから数時間が経ち、空は既に夕暮れとなっていた。そんな中近くの街でソーガは一人、一枚の紙を見ていた。そこには教会の襲撃者らしき人物が描かれていたのだが……それはまさにトーマだった。

「ちっ、完全にトーマが犯人扱いかよ。ふざけやがって………」

ソーガは紙を破り捨て、近くの森に向かった。何故、ソーガがこの街にいるかというと……それは数時間前のこと、ヴァイロンとの戦いのあと近くの森に避難したソーガ達は、早速傷の治療を行おうとしたが……突然トーマが苦しみだし、そのまま倒れてしまった。ソーガは宝瓶宮のベルを召喚し、リリィとイリスとスティードとベルを残し、アイシスと共に食料の買出しに向い、町の入口でアイシスと別れたのだったが……現在の状況を知り、ソーガは少し焦っていた。

「何やってるんだよ。管理局は。ロクに調べもせずに容疑者扱いかよ。」

ソーガは急いでトーマ達の所へ向かうのだったが……突然森の木々が切られ倒れた。ソーガは現れた人物を睨んだ。

「急いでるんだよ。邪魔すんじゃねぇ」

「あら、久しぶりの再会じゃない。ねぇ、ソーガ・ベルリッツ。」

「何の用だよ。アイリス。狙いはトーマか」

「ふふ、そうね。私たちは彼も狙ってるわ。だけど、私個人としては貴方に興味があるわ。ねぇ、黄道十二宮の使い手」

「そんなに俺の魔法に興味があるのか？」

「えぇ、なんせその魔法は失われた魔法。いわゆるロストマジックと呼ばれるものよ。でもその魔法も既に消滅しているはずなのに……何であなたが所持してるのかしら？」

「知らねぇよ。親父が俺に与えた気がするんだよ。答えはそれでいいか？」

「そうね、いいけど………貴方はここで死んでもらうから、私たちの計画の邪魔ですもの」

アイリスはそう言って、刀を抜いた。ソーガはため息を付き双児宮のツインを召喚した。

「来なさい。この間の借りは返すわ。」

「返す必要はないぜ。ずっと借りっぱなしで………」

二人は剣が同時にぶつかり合った。だが、それがソーガに取って辛いものになるとは思わなかった。

森の奥でイリス達が見守る中、トーマは熱に苦しんでいた。心配そうにリリィが見守る中イリスはリリィに話しかけた。

「リリィも休んだら？後は私が診ておくから」

『ううん、大丈夫だよ。だってトーマがこんな事になったのは私の責任だもん。私が………『毒』だから』

リリィは悲しそうに言うと、イリスはそっとリリィを抱きしめた。

「大丈夫だよ。あなたの責任じゃない。それに貴方は『毒』じゃない。『毒』は………」

『イリス？』

「何でもない。ベルちゃん。調子はどう？」

「はい、トーマさんは大丈夫です。熱も少しですが引いてきましたので、でもここまでひどい症状だと私でも手に負えません。ここは

スコルの出番なのですが、マスターが帰って来ないと……」

『スコル？』

リリィは不思議そうに聞いてきた。イリスはその問に笑顔で答えた。

「スコルはソーガが持ってる十二宮魔法の一つだよ。毒に関する知識もあって、きっとトーマのこともどうにか出来るはず。」

『で、でも、』

「私もリリィと同じようなものだからね。」

『えっ？』

トーマは熱にうなされながら、昔のことを思い出していた。それは温かい日常。幸せの日々。だが、それも一つの事件で終わった。鉱山での事故をキッカケに……トーマはその事故の唯一の生存者であり、その事故を起こした犯人を見ていた。

トーマはその犯人に復讐を誓う。だが、そんな憎しみの心も一人の女性と出会ったことで薄れていった。スゥちゃんのおかげでトーマは再び幸せの日常を歩めるはずだった。恩人達に心を救われ、家族になってもいいと言われ、そして……同じ境遇であるソーガと出会った。トーマはもう一度幸せになるために旅に出て、過去と踏ん切りをつけようとしたのだが……そこに奴が現れた。家族の仇かもしれない男と……薄れた憎しみは濃くなった。折角の幸せを奴が壊そうとする。トーマは心のなかで一つのことを決心した。壊される前に奴を殺そうと

トーマは突然苦しみだした。イリスとベルは必死にトーマに呼びかける。そんな中リリィはこんな時に何も出来ない自分に悲しんでいた。そんな中、声が聞こえた。

「そのままに放っておけ。エクリプスドライバーがあるべき姿になるだけだ」

現れたのは褐色の肌に、腰には刀を身につけ、右目に眼帯を付けた女が立っていた。イリスとベルは咄嗟に警戒した。

「だ、誰？」

「そうか、貴様があの黄道十二宮の一人か。今は貴様らに興味がない。必要なのはそこの少年だけだ。」

女は刀を抜き、イリス達に抜けた。

「どけ、ジャマをするなら………切り伏せる」

女が刀を構えた瞬間、突然女の腕にチェーンバインドに縛られた。

イリス達は上空を見るとそこには二つの影があった。

「全員動くな。武器を捨てて、両手を上げろ」

「管理局特務六課だ。危険物所持及び暴行の現行犯で逮捕する。」

現れたのは剣の騎士、シグナムとユニゾンデバイス　アギトだった。

「魔導師？いや、騎士か。連れているのは融合機だな」

女はバインドを破ると、刀をシグナムに向けた。

「『動くな』と言ったはずだ。次一歩でも動けば、誰であろうと切り伏せる。」

その頃、ソーガは………アイリスとの何度目かのぶつかり合いをしていた。

「どうした？ 魔法は使わないのか？」

「そうね、貴方に魔法なしでやってみようと思ったんだけど………そんなの必要ないわね。」

ソーガとアイリスが剣を構えていると、ベルから連絡を受けた。

『マスター、大変です。フッケバインらしき人に見つかって、さらに管理局にも見つかりました。』

『何だと、クソッタレが。今すぐ向かいたいところだが………邪魔が入ってる』

『そんな、』

『急いで向かう。』

念話を終えると、ソーガは剣を下ろした。アイリスは不思議そうに見ていた。

「何のつもりかしら？」

「悪いが、時間がないんだよ。さっさと終わらす。全てを破壊する拳となれ、そして彼者を破壊せよ。金牛宮のタウロス」

ソーガの右手に金色の拳具が装着された。ソーガは構えを取る

「そんなモノで私に勝てるの？」

「あぁ、しっかり喰らえよ。もう二度と味わえないぜ。」

「そう、喰らえ『水神の息吹』」

アイリスの刀に大量の水が纏わり付き、巨大な刃と姿を変え、ソーガに向かって切り掛かる。だが、ソーガは右手に全魔力集中させせた。

「『金牛の双角（ディアルホーン）1』」

二人の攻撃がぶつかり合い、森は激しく揺れるのだった。

トーマ０３　魔導殺し（前書き）

今回はシグナムｖｓサイファーの戦いです。さらにあのキャラが登場です。当麻はまだ登場しません。

トーマ03　魔導殺し

「もう一度言う。武器を捨てて投降しろ」
シグナムはレヴァンティンに炎を纏わせ、サイファーに警告をする。
それを見てサイファーは………
「炎熱変換。ますます面白い。そこの破損プラグ」
サイファーはリリィを見ながら問いかけた。
「私の戦いをよく見ていろ。そうすればお前も己の成すべきことを思い出すだろう。それから死にたくなければ動くなよ。お前たちはもう局の連中にとっては抹消しても問題ない存在だ。と………無関係の奴がいたな。」
サイファーはイリスの方を見た。イリスは動かずにサイファーを睨んでいた。
「貴様も動くな。ヴァイロンが言っていた男の連れだろ。そいつにも会っておきたいからな。」
「ソーガくんとは会ってないんですか？」
「ソーガ？あの男の事か。安心しろ。まだ手は出していない。」
サイファーはシグナムのところへ向かった。
「さて、武器を捨てずに動いたぞ。どうする公僕？」

シグナムとサイファーはお互いの剣を構え、同時にぶつかり合った。

森の入口で、アイリスは木にもたれかかりながら、ヴィクサーに連絡をとっていた。

「やっと、繋がった。もしもしヴィクサー」

『アイリスか。何かあったのか？あの創造主の息子を追っていたはずだ』

「えぇ、そうよ。だけど見事に返り討ちに遭っちゃった。私の刀を折られて、さらにはちょっとしばらくは動けないようになっちゃった。」

『貴様ほどの実力者がそこまでやられるとはな』

「ふふ、あの子。かなり強いわ。それも大切なモノを守ろうとしたときのみだけどね。でも、ちょっと意地悪しちゃった。」

『ふん、悪あがきか。いいだろう直ぐに迎えに行く』

(さぁ、迷いなさい。私が張った水の幻想の迷路で彷徨ってね。)

「くそ、ここもさっき通った場所じゃねぇか」

ソーガはさっきから何度も同じ場所をグルグルと回っていた。

「あの女。面倒なことを……」

『やばいですね。この魔法は時間が経てば直ぐに消えますが………このままだとしばらくは出れません』

「くそ、間に合ってくれよ。」

ソーガは走りだした。苦しんでいるトーマも元へと………

シグナムとサイファーの何度目かのぶつかり合いを繰り返していた。
「居るものだな。強者というものは」
二つの剣が何度も交差するそんな中レヴァンティンが鞭状に変わった。
(ｓｃｈｌａｎｇｅ　Ｆｏｒｍ)
(鞭？いや、連結刃)
サイファーはシグナムの連結刃を回避しようとする。
(速い！剣尖の軌道が…読めな…うおぉッ！)
軌道が読めず、サイファーの頬を軽く斬りつけるレヴァンティンの刃。
(Ｓｃｈｗｅｒｔ　ｆｏｒｍ)
『フィールドエフェクト分析完了。行けるよ。シグナム』
二人の戦いを離れてみていたアギトが念話でシグナムに呼びかける。

『よし、来いアギト』

『ユニゾン・イン』

シグナムとアギトはユニゾンをし、シグナムの背中に紫色の炎の翼が生えた。

「貴様は『フッケバイン』の一味だな？」

「確かにこいつはディバイダーで、私はフッケバイン一家の最初期からのメンバーだ…我々と何か因縁でも？」

「3ヶ月前、第14無人世界の開墾地。その地で貴様らが殺した人々、民間人67名と局員12名を覚えているか？」

「あぁ、そんな事があったな」

「以前友と部下たちと視察に行ったことがある。平和で穏やかな土地だった。何を持つでもない穏やかな開拓者達だった。そんな人々を貴様らが虐殺した理由はなんだ」

シグナムは穏やかに暮らしていた人々を思い出しながらサイファーに問いかける。サイファーは興味がなさそうに答えた。

「つまらない殺しは本意ではないが色々と必要でな。まぁ、喜べ。今思い出した。殺したのは私だ。あの地にいた者たちを皆殺しにした。間違いない。私だ」

サイファーがそう答えた瞬間、強力な一閃をサイファーにぶつけた。
サイファーは咄嗟に刀の鞘で防御をしたが……

「紫電一閃」

シグナムの紫電一閃が確実にサイファーに届く。サイファーは地面に叩きつけられた…が。

アギト「やったか」

シグナム「まだ…腕一本。だが………」

シグナムはレヴァンティンの刃を見た。刃にはヒビが入っていた。

（レヴァンティンにヒビを入れたのは上条以来だ。）

サイファーは腕を切られもう片方の腕で傷口を抑えていた。

「凄まじいな。分断が間に合わなかった。生身のままだと死んでいたぞ。」

サイファーは直ぐに無くなった腕を再生させた。

「久しぶりにまともな戦いができそうだ。」

様子を見ていたシグナムとアギトは動かないサイファーを見ていた。

（何を企んでいる？）

「シグナム。捕獲システムセット完了だ。」

「あぁ………」

「そこの騎士。腕を切ったお礼だ。見せてやる。」

（Ｅｎｇａｇｅ ｋｏｎｉｇ ９４４．）

サイファーは小さなナイフを…。

（ｒｅａｃｔ ．）

自身の左手に差し込んだ。

サイファー「…これが、ＥＣ兵器の起動状態…世界を殺す猛毒だ。魔導殺しの双剣止められるものなら止めてみろ。」

ディバイダー９４４「ケーニッヒ・リアクテッド」彼女、サイファーの武装である。

リリィとイリスは黙って二人の戦いを見守っていた。そんな時アイシスが戻ってきた。

「アイシスさん」

『アイシス』

「大丈夫？　二人とも。今スティードが脱走経路を探してくれてる」

「そうなんだ。でもまだソーガくんが」

「あの人なら大丈夫でしょ。安全な場所にトーマを運んだらスティードがギルに連絡してくれるから……」

『アイシス。』

「イリス、私と一緒にトーマを、リリィは荷物をよろしく」

『うん』

三人がトーマを運ぼうとした瞬間、トーマから黒い魔力が溢れ出した。

「が、があああ」

「どうやら、奴も目覚めたらしいな。どうする公僕？奴を我々と同じ感染者として殺すか？世界の毒となった我々の同士を」

トーマの姿は禍々しい戦士の姿と変わった。全身には黒い刺青が刻まれ、ディバイダーも巨大な大剣と変わった。

「……アギト。融合解除をし、彼らを保護しろ。」

「分かった。遅延魔法を置いておく。左手に火炎弾、右手に捕獲輪だ！」

「心得た…」

アギトは融合を解除し、トーマたちのところへ向かった。シグナムはサイファーを睨んだ。

「確かにお前たちフッケバインや彼は毒に侵された。だが………それは彼に取っては呪いと一緒だ。彼はあらゆる異能をその手で殺し。私たちの悲しみも殺した。貴様達の毒も彼に取ってはただの異能と同じだ。」

「彼？何の話か分からないな。だが………もうお前は終わりだ」

シグナムは火炎弾、捕獲輪をサイファーに放つが……「魔導殺し」の名の通り魔力エネルギーの結合分断、魔力によって編成された弾丸や保護された物質は、武具の堅さではない「ＥＣ兵器の起動状態」のサイファーには効かず…レヴァンテインは折れてしまった。

「くっ、」

「貴様が言っていた彼とやら伝えておけ。殺せるものなら殺してみろと」

二つの斬撃がシグナムの体を切り刻み、シグナムはそのまま地面に落ちた。さらにアギトに魔弾を食らわし、サイファーは二人を撃退した。

トーマの暴走を止めようとしていたイリスたちだったが、

「ヘイヘイヘ〜イ！ど〜よ？見事な捕獲術！」

突然現れた一人の少女がトーマ達を特殊なロープで捕獲した…

「そしてアル様、颯爽と登場ってね！」

「………ッ！」

「うおっと、アブネェ！寝てろ、ぺったんこ胸め！」

アルナージという少女は、ロープで動けなくなった４人を催涙スプ

レーで眠らせた。

「サイ姉。こっちは終わったよ。どうせこいつらをどう持って帰るか考えてないんだろ」

「アルか。一人増えているようだが……まぁいい。連れて行くか」

サイファーとアルベージがトーマたちを連れていこうとした瞬間、二人の前に巨大な大剣が落ちて来た。

「これは……まだ仲間がいたか。アル、先にいけ」

「あいよ。」

アルベージを先に逃がしたサイファー。そのサイファーの前に一人の男が現れた。

「誰だ？貴様は……さっきの騎士の仲間か？」

「いや、仲間ではない。激戦を繰り返した友だ。」

現れた男は青色い髪に、石を削りとったような顔立ち、そして、屈強な体つきの男。かつてシグナム達と戦い、共に戦った男。聖人の力を宿した男の名は……

「ウィリアム＝オルウェル。この世界ではアックアと名乗っている。」

「アックア？そうか思い出したぞ。貴様はオルドレイク事件の時に現れたという男か。この場で貴様と戦いたいが……今はその時で

はないな。いずれ相見えよう」

サイファーはそう言い残し、どこかへと消え去った。残ったアックアは大剣を抜き、

「フッケバイン。友を傷つけた罪。決して軽くはないぞ。」

そう言って、倒れたシグナムとアギトのところへと向かった。

それから数分後、ソーガは…………いなくなったトーマ達を探していた。

「…………トーマ、イリス。攫ったのは…………」

遠くの方では管理局が集まっていた。管理局が動いているということは、トーマたちを攫ったのはフッケバインだと気がついた。

「フッケバイン。俺の弟を…………俺の大切な奴を攫ったこと後悔させてやるよ。」

ソーガとギルはそのままその世界から姿を消すのだった。

トーマ０４　フッケバイン？（前書き）

今回もトーマ側の話ですが、今回はなのは達側の話になります。というかやっと海上での戦いに入れる。

トーマ04　フッケバイン？

ヴァルフラム

ヴァルフラムの司令室にはアックア、神裂、土御門の三人が来ていた。

「シグナム、アギトの両名はかなりの重症を受けた。こちらの魔術でも治療を試みているが………危険に変りない。」

アックアがシグナムとアギトの傷の具合を報告するとはやては少し疲れた表情で答えた。

「あの二人のこと、しばらく戦闘に参加は無理や。あの二人をあそこまで傷つけたフッケバインの力は計り知れせん。こちらもそれに太刀打ちする力は完成しつつあるんやけど………魔術側や科学側に増援を頼めへんか？」

「それは無理だぜ。はやて司令官。こちらの世界の介入は今回は俺やねーちんしかいない。アックアの場合はたまたまこちらに来ていただけだ。」

「すまない。私がもう少し早く駆けつけていれば………」

「気にせんでもえぇ、それよりも気になるのがフッケバインが攫った子供のことや。確か、一般市民が二人、リアクトプラグらしき少女が一人に………現在教会襲撃者らしき少年が捕まっていることや。」

「確かその少年の方はスバル・ナカジマの………」
「うん、スバルは彼と話しあって事情を聞きたいらしいや。私らもそうしたいんやけど………」
「フッケバインの補足は上手くいっていないか。」
アックアが淡々と述べる中、リインとリインフォースが司令室に入ってきた。
「土御門殿。少しスバルが話があるらしい。」
「Ok。ねーちんとアックアは現状報告とか聞いて置いてくれ。」
土御門はリインフォースと一緒に司令室を後にするのだった。
リインフォースに連れてこられたのは格納庫だった。そこにはスバルの他にエリオもいた。
「土御門さん。」

「よぉ、スバル。元気にしてるみたいだにゃ。エリオも大きくなったな」

「はい、土御門さんとは6年前に会ったきりですね。」

「そうだったな。覇王っ子の話とかもかみやん達から聞いていただけだぜ。それでスバル。俺に何の用だ？」

スバルもはやてと同じように少し疲れているような顔をしていた。

「土御門さん。私……トーマが何であんな事をやったのか聞きたいんです。でも……」

「トーマって奴はフッケバインと一緒にいる可能性がある。会うとしたら戦いの中で救出しなきゃいけないないな。」

「それに、トーマもディバイダーを手にしている可能性があるからエクリプスに……治る見込みとかあるんですか？」

「それはまだだ。エクリプスもシャマルのねーちんが調べてるみたいだけど……スバル。もしトーマがお前に剣を向けるとしたらどうする？戦うか？」

「はい、戦って訳を聞きます。あの子の時もそうだったように……」

「ソーガか。あいつはきかん坊だったな。ソーガがどこにいるかは？」

「いえ、少し前にトーマと合流すると手紙がきただけで……今はどこにいるかは……」

スバルはポケットからロケットを取り出し、その中に入れた写真を見た。写真には幼い頃のソーガとヴィヴィオとアインハルトの姿が写されていた。

「ヴィヴィオやアインハルトもソーガが旅に出てちょっと寂しがってるみたいですね。あの子は二人のお兄さん的なものですから……
…」

「それを言うならスターもだ。張り合うライバルと会えなくって寂しがってるぜ。」

「この任務が終わったら、また学園都市に行きませんか？スバルさん。」

エリオがそう提案をし、土御門もそれに賛成する中、スバルは遠くにいる二人の弟のことを気にしていた。

（トーマ。無事でいて、ソーガ。どこに居るかは分からないけど…
…たった一人の弟が危ないよ。お兄ちゃんなら守りに来て………）

司令室を後にした神裂とアックアが次に訪れた場所は作戦室だった。
そこにはなのはとフェイトとヴィータの三人が待っていた。

「神裂さん。アックアさんも、久しぶりです。」

「高町なのは、フェイト・テスタロッサ。ヴィータ。三人とも久しいな。」

「神裂も、アックアも元気そうですね。」

「ヴィータ。フッケバインの居所が判明したのだな。」

「あぁ、奴らは海上を超高速で移動してる。何とか補足はできた。一時間後に作戦開始だ。」

モニターに映し出されたのはフッケバインの戦艦だった。五人はその戦艦を眺める中、アックアが何かの気配を感じ取った。

「誰かいるな。出てこい。」

「……バレましたか。」

作戦室の物陰から出てきたのはスターだった。スターの今の姿は19歳の頃のなのはと瓜二つだった。

「スターさん。いつの間に……」

「今回の作戦。きっと私の力が必要だと思い。それに………感じるんです。彼の力を………」

「彼って、もしかしてソーガくん？」

なのはがそう言うとスターは少し顔を赤らめながら頷く。スターは2年前にソーガと一悶着があったらしいが……それから少しずつだが好意を寄せていたりする。

「それに、魔導殺し相手にインデックスが必勝を授けてくれました。それにあの子達の力………」

「闇の欠片達の………」

「はい、精一杯力を出し切ります。」

そして、一時間後フッケバインとの戦いが始まろうとしていた。だが、その戦いはトーマの流した涙で危機的な状況に陥り、そんな中ソーガは…………そして当麻は………

トーマ04　フッケバイン？（後書き）

次回から海上編が始まります。とあるキャラも何人か出したいですね。それにやっと当麻も出てこれるかも………

ちなみにスターが言った闇の欠片達の力については、入手した話はＶｉｖｉｄの方でやります。

トーマ05　フッケバイン？（前書き）

フッケバインに捕まったトーマは………そしてついに戦いが始まる。

トーマ05　フッケバイン？

フッケバインアジト

アジトのある一室でトーマは目を覚ました。両腕は縛られ椅子に座らされている。

「うっ、」

「あぁ、やっと目覚めましたか」

トーマの前には優しいそうな感じをした男と筋肉質の男がいた。優しそうな男はトーマに薬を飲ませた。トーマは薬を飲み干すと二人を睨みつけた。

「ここどこだ………？あんたらは……？」

「ここは僕らの本拠地で、僕らは世間から凶悪犯罪者集団なんて呼ばれているファミリー。『フッケバイン』のメンバーです。僕はフォルティス。そこの彼はドゥビル。貴方に分かりやすく言えばヴァイロンの仲間ですね」

フォルティスはそう言って、腕に刻まれた刺青を見せるのだった。

その頃、イリスは………

「ありがとうございます。」

小さな少女、フッケバインの一人ステラに服を脱がされていた。

「…………」

ステラは身振り手振りで話した。

「えっと、『ごめんなさい。家のヴァイロンが無理やり脱がそうとして………』ううん、私の方こそ捕まってる身なのにこんなことさせてもらってごめんね。」

ステラは直ぐにイリスの服を脱がした。イリスは素っ裸にされたが………ステラはある部分を見て驚いた。

「…………」

「えっ、『背中の傷？』これはね…………罪の証なの。あんまり見

られたくないけど……ステラちゃんや他の女の人達には見られても平気かな」

イリスの背中には翼のような傷跡があった。

トーマはフォルティスからトーマの住んでいた街の仇は自分たちフッケバインではないということを話し、さらにエクリプス感染者は人を殺す毒ということも教えられた。そしてフッケバインからの勧誘を受けるのだった。

「あの少年。素直に恭順するとおもうか？」

フォルティスとドゥビルは通路を歩きながらトーマの事を話していた。

「どうでしょう？聞き分けのいい子には見えましたが………まぁ、いずれにせよ………」

その時、フッケバインアジト内にアラームが鳴った。

『敵機接近。ＬＳ級管理局艦船です。』

「どうやら、来たようですね。」

ヴァルフラム管制室

はやてはそこで指示を出した。

「ようやく見つけたで、フッケバイン。ここからは私達の番や。主砲三人頼むで、そして潜入部隊も準備しといてや」

船の看板にはなのはとヴィータの二人がフッケバインの戦艦を狙っていた。

「それじゃあ、行こうか。ヴィータちゃん。スターさん」

「あぁ、」

「えぇ、」

特務六課とフッケバインの戦いが今にも始まりそうだった。

そしてある場所には………

「やっと見つけたぜ。フッケバイン」

ソーガはギルを稼動させると緑色の翼を生やした。

「容赦はしないぜ。糞野郎」

トーマ06　フッケバイン？（前書き）

今回、ついにソーガが登場です。さらに神機人も乱入です。

トーマ06　フッケバイン？

移動要塞フッケバインに対して警告しつつ攻撃をするヴァルフラム。
だが、ヴァルフラムの魔導砲は移動要塞の張るフィールドによって中和されてしまっていた。だが、

「それじゃあ、主砲三人任せたで」

主砲・なのは、ヴィータ、は魔導殺しに対抗した武装『ストライクカノン』と『プラズマパイル』で中和フィールドを抜け、攻撃し続けた結果、移動要塞に風穴を開けた。そしてスターは…

「では、私はフェイトたちと一緒に制圧しに行きます。『マテリアルF』」

スターのバリアジャケットが通常時から雷刃の襲撃者が装備していたバリアジャケットに変わった。

「まかせたよ。スターさん」

「はい」

ヴァルフラムのハッチでは制圧部隊のフェイト、エリオ、スバル、神裂、アックアの五人がいた。

「じゃあ、みんな行こうか」

フェイトがそう呼びかける中、スバルとエリオは……

「スバルさん。大丈夫ですか？」

「エリオ。大丈夫だよ。今はフッケバインを検挙しないとね」

そういって、スバルは強がるが内心はトーマの事が心配であった。

すると神裂とアックアは……

「あまりそう言った事を考えるな。」

「貴方はフッケバインに捕まった人のことを考えてください。フッケバインは我々が……」

「ありがとうございます。神裂さん、アックアさん」

五人はヴァルフラムから移動要塞の破損箇所から潜入するのだった。

フッケバイン内部

五人が潜入したと同時に破損箇所が修復を開始した。これはステラが移動要塞にエンゲージした能力の一つだった。五人がしばらく通路を突き進むと開けた場所に出た。そしてそこには……

「我々の本拠地に侵入するとは……貴様ら生きて出られると思うなよ。」

サイファー、ドゥビル、ヴェイロンの三人が待ち構えていた。するとサイファーは見覚えがある顔を見つけた。

「ほう、また出会ったな異界の騎士よ」

「ここが貴様と私の戦う部隊ということだな」

「ふふ、相手してやる。」

特務六課制圧部隊とフッケバインがぶつかろうとする中、突然二つの勢力の間に一本の刀が突き刺さった。

「こんにちわ。管理局のみなさん。そしてフッケバインのみなさん。」

「いい具合に集まったじゃねぇか。」

突然現れたのはアイリスとレルの二人だった。二人は二つの勢力を見つめると……

「ディバイダーがたくさんあるわね。」

「それに管理局にも宣戦布告が出来るぜ。」

「貴様ら……何者だ？」

サイファーが二人にそう尋ねるとレルとアイリスが答えた。

「オルドレイク・ベルリッツが創りし破壊兵器・神機人。」

「目的はディバイダーを使っての究極破壊兵器・神機王の復活。さぁ、三つ巴の戦いを始めよう」

操舵室ではステラとフォルティスがサイファーたちの様子を見ていた。

「あの人達誰？人の船に侵入するなんて……」

「神機人。あのオルドレイク・ベルリッツが創りだしたと言われる破壊兵器ですよ。確か神機王はカレンがディバイダーで封印したとか……彼らはそれの復活が目的ですね。」

フォルティスが冷静にステラの質問に答えていると、ステラがある反応を見つけた。

「ねぇ、こっちに向かって何かが来るんだけど………」

「何かって……公僕の新兵器でしょう」

「ううん、これは……巨大な魔力の塊？って………」

突然移動要塞が揺れ始めた。ステラが原因を調べるとそこには一人の少年が移動要塞に侵入する姿だった。

「また侵入者だよ」

「おかしいですね。どうやってここに………」

フッケバイン、特務六課が神機人と睨み続けていると突然上から何かが降りてきた。そして、レルを吹き飛ばした。

「ぐへ」

「レル！管理局のひとかしら？それともフッケバイン？」

アイリスが降ってきたものに警戒するとそこには………

「ようやく、見つけたぜ。フッケバイン。人の大切なモノを傷つけ、攫った奴らが………死ぬ覚悟は出来てるな。」

金牛宮と獅子宮を装備したソーガがいた。ソーガはいつもと違い、限りなく殺意を抱いた魔力を見にまとっていた。

「俺の邪魔をする奴は………全員殺す。」

ソーガ06　暴走のソーガ（前書き）

今回、ソーガの力が発揮されます。その強さは本編で

ソーガ０６　暴走のソーガ

フッケバイン、特務六課、神機人の三つ巴の戦いに乱入してきたのはソーガだった。だが、今までのソーガとは違った。

「アイツらを攫ったのは誰だ？」

ソーガはフッケバイン三人を睨むと、サイファーが前に出て言った。

「アイツら？　あぁ、あの同士二人と、あの少女か。それなら私がここに連れてきた。それが………がぁ」

サイファーが何かを言いかけようとした瞬間、ソーガは金牛宮でサイファーの腹を思いっきり殴った。サイファーは少し後ずさり、腹を抑えた。

（ぼ、馬鹿な。奴の魔法がどんなものだろうとリアクト状態の私に……ダメージを………）

「まだだ。獅子炎王斬！！」

サイファーがさっき起きたことについて考えている隙にソーガは上に跳び大技をサイファーに食らわせ、サイファーはそのまま倒れた。

「まずは一人。あとは………」

ソーガは殺意を込めた眼でこの場にいた全員を睨んだ。そう、スバル達をも………スバルはソーガのそんな姿を見て、震えていた。

「そ、ソーガ？どうしてここに？それに……何でそんな眼なの？それじゃまるで……昔みたいだよ」

「……スバル姉ちゃん。悪いけど、スバル姉ちゃんでも俺を止めることは出来ないよ。俺は……」

「よそ見してる場合か？小僧」

「そうね。ソーガ！」

ソーガがスバルの方を見ている隙を付き、ヴェイロンとアイリスがソーガを背後から襲いかかった。だが、ソーガは後ろを向いたまま、金牛宮を解除し、磨羯宮を出現させ、二人を黒い魔力弾に包み込んだ。

「がはぁ！」

「うくぅ、」

「……俺はもう前みたいに温かい感情は要らない。今は昔みたいに人を憎みながら生きていく。そう昔みたいに……」

五年前

とある世界のとある村でティアナとスバルはあることを調査しに行っていた。

「それで、村長。その子は今は……」

「はい、彼はこの村の近くにある山に一人で暮らしています。」

ティアナがそう聞くと、スバルはさらに質問をした。

「何で彼は山に一人で……」

「それは……我々のせいなのです。我々が彼にやってはいけないコトをしてしまったんだ。」

「やってはいけないコト？」

「はい、我々は彼に………優しくしてしまった。それが彼が山で一人で暮らすことに………お願いします。彼を……ソーガをすくってください。」

ソーガ０６　暴走のソーガ（後書き）

次回はソーガの過去話です。果たしてソーガの過去とは………

ソーガ07　ソーガの過去（前書き）

今回はソーガの過去です。ソーガとスバルとティアの出会いとは……

ソーガ07　ソーガの過去

山の奥深く、スバルとティアナの二人はそんな山奥の中にある小屋の前に来ていた。

「ここがそのソーガって子が住んでる場所だよね」

「そうね、それにしても……そのソーガって子。なのはさんから彼の経歴を聞いたときはびっくりしたけど……本当なのかしら？」

「どうだろうね？とりあえず会ってみよう」

スバルはそう言って、小屋の扉をノックする。だが、誰も出てこなかった。

「あれ？」

「いないのかしら？」

二人は住人が出てこない事に困り果てていると、二人の後ろの茂みからガサガサと音がした。二人が後ろを振り向くとそこには一人の少年がいた。

「お姉さんたち誰？」

「あ、君がソーガくん？」

スバルがソーガに話しかけた瞬間、ソーガは手に持っていたナイフをスバルの首筋に当てた。

「もしかして、村長に言われて来た人？悪いけど俺は誰にも救って欲しくないし、誰にも同情されたくないから……」

ソーガはそう言って、また森の中に入っていった。

「あの子がソーガね。というかスバル？大丈夫？」

「え、あ、うん、大丈夫だけど……あの子何だか悲しい目してた。ちょっと追いかけてくる。ティアは先に村に降りてて」

「ちょ、スバル。って行っちゃったか。まぁ、ああいう子はスバルに任せたほうがいいわね。」

ソーガは崖下に来ていた。

（完全に撒いたよね。本当に迷惑な村長だよ。俺みたいな親が犯罪者の奴なんて放っておけばいいのに……それに……強くならないと……アイツを……）

すると森の中からスバルが現れた。ソーガは追いついてきたスバルを見て驚いていた。

「お姉さん。完全に撒いたと思ったのに……」

「えへへ、ちゃんと追跡してたんだよ。それにね、完全とかこの世にはないからね」

スバルの笑顔を見てソーガはため息を付いた。

「はぁ、何か頑張ってもお姉さんに敵いそうにないよ。それでお姉さんの目的は何？村に連れ戻そうとかだったら断るけど……」

「ううん、君を保護しにきたんだよ。」

「保護って、お姉さんは管理局の人？だったら余計に保護なんてされたくないよ。」

ソーガはそう言ってまたどこかへと行こうとすると、スバルに腕を

掴まれた。

「何で保護されたくないの？まずは話を聞かせてほしいな」

「………」

ソーガは観念して、スバルを自分が住んでいる小屋で話すことにした。

小屋に招き入れたソーガはスバルに事情を話した。

「お姉さんたちは俺の親………父親の事は知ってるんだよね」

「うん、ソーガ・ベルリッツ。オルドレイク・ベルリッツの息子だよね。」

「確か貴方のお母さんが亡くなったときにソーガは村の村長の家で住んでたんだっけ？」

「そう、村長からは親父が俺をおいてどこかへ行ったって聞いてたんだ。そして……あの次元テロで俺は親父のことを知ったんだ。それからだよ。どっかの記者とかが俺に話しに来たんだ。それも大勢。村長や村の人達は俺のことを守ってくれたんだけど……俺は思ったんだ。俺のために傷つく姿は見たくないって……だから俺は村から出てここに住んでる。」

ソーガが話し終えるとスバルは真剣な表情で聞いてきた。

「ねぇ、それ以外にも何かあるよね。村長から聞いたんだけど、君は誰かのために強くなろうとしてるって……それって誰？」

「…………」

ソーガは少し黙り込んだ。そしてしばらく経ってから口を開いた。

「幼なじみ。」

「幼なじみ？」

「うん、村で仲良かった子なんだけど……そいつは親父が残した魔法に触れたんだ。」

「オルドレイクの？」

ソーガはスバルに白い小瓶を見せた。その瓶にはいくつもの模様が刻まれていた。

「親父が残した資料だとそれはロストマジック。『黄道十二宮』。アイツはそれに触れて十二宮の一つを体に取り込んでしまった。その後だよ。管理局の怪しい研究者がアイツを連れ去ったのは……俺は強くなってアイツを取り返したんだ。」

「そっか、ねぇ、その十二宮魔法見せて」

スバルは笑顔でそう言うと、ソーガはため息を付いて外に出た。

「一個だけだよ。といってもまだ一個しか契約してないから………双児宮ツイン」

ソーガの前に二人の少女が現れた。

「あれ？マスター。何の用？」

「遊んでくれるの？」

「ちょっとそこのお姉さんに見せただけだから」

「凄いね。召喚魔法？」

「それと装備魔法。かなり特殊だし、それに一体ずつ契約とかしないといけないから………」

「そうなんだ。じゃあ、ここでお姉さんから提案なんだけどいいかな？」

「何？」

「ソーガはお父さんのことは許せないの？」

「……いや、村長から聞いた話だと父さんが変わったのは母さんが死んだ時からだって……」

「それじゃあ、両親のこともっと知りたくない？」

「知れるものなら……」

「二つ目はその幼なじみの捜索。私も手伝わせてほしいな。」

「………でもアイツを研究所とかに送り込んだりとかは……」

「しないよ。絶対に」

「それなら、信用する。」

「それじゃあ、私の弟になること決定だね」

「へっ？」

「じゃあ、行こうか」

スバルは微笑みながら、ソーガの腕を引っ張る。そしてその後村長のところに行き、ソーガをつれていくことの許可を取り、ソーガはなし崩し的にスバルの弟となるのだった。

そして、そんな事があってから数ヵ月後、穏やかに暮らしていたソーガは………

「あぁもう、何なんだよ。あのスターは」

「あれ？今日もスターと喧嘩したの？」

家に帰ってきたのを出迎えてくれたスバル。ソーガは少しずつだが友達もできていたのだった。

「喧嘩というか。何かいちいち何か言ってくるだよ。」

「喧嘩するほど、仲がいいからね。」

そして移動要塞内の戦闘に戻った。ソーガは過去の事を思い出していた。

「そうか………そうだったよな。」

ソーガは何かを思い出すと、突然さっき倒されたヴェイロンがソーガの頭をつかんだ。

「やってくれたな。クソガキ。『ナパーム・ファング』」

ヴェイロンの手から炎が現れ、ソーガはそれを直撃した。

「ソーガ！！」

スバルは咄嗟にソーガの名前を叫んだ。ヴェイロンはソーガを確実に倒したと思った。だが、ヴェイロンの攻撃は直撃していなかった。

「ありがとうよ。あんたの攻撃で頭に上ってた血が収まったよ。天蠍宮のスコル。金牛宮のタウロス。ツインソウル。」

ソーガの両腕に十二宮魔法が宿り、スコルの鞭でヴェイロンを縛り上げ、タウロスの腕でヴァイロンを吹き飛ばした。

「がはっ、」

「さて、名乗らしてもらうぜ。俺は十二宮魔法の使い手　ソーガ・ベルリッツ。フッケバイン、お前が奪った仲間を返してもらうぜ。」

一方海底に沈んだ遺跡の中にヴィクサーがいた。ヴィクサーは遺跡の奥にある二体の像を見ていた。

「ようやく見つけたぞ。やはり近くでディバイダーが存在するからか。今目覚めさせます。」

ヴィクサーは二体の像に向けて雷を落とすと像は崩れ、そこには二体の神機人が立っていた。

「久しぶりだな。炎の神機人リオン。雪の神機人ルア」

「ふぅ、久しぶりの外だぜ。」

真っ赤な髪に右腕が真っ赤に燃え上がらせている男リオン。

「やっと封印が解けたわね。」

白い髪に背中に雪の結晶みたいな翼を生やしたルアが復活したのだった。するとリオンはヴィクサーの事を見て……

「あん、何か見た目変わったな。」

「あぁ、昔、突然現れたアナザーと言う男からこの体を借りたのだ。その所為か半分の力もでない。」

「では、我々はお守り致します。神機人の王よ」

神機人の幹部がこうして全員揃うのであった。

ソーガ＆トーマ０４　ディバイドゼロ・エクリプス（前書き）

ついにトーマの暴走です。

ソーガ&トーマ04　ディバイドゼロ・エクリプス

ソーガたちが戦闘中、アイシスはアルが施した拘束を自力で解除していた。

アイシス「この戦闘……あいつらと管理局が戦ってるんだっけ。今のうちに抜け出してトーマとリリィとイリスを助け出さないと……『アーマージャケット・オン』」

アイシスは自前のバリアジャケットに装備し、トーマたちを探しだした。

一方、ソーガはドゥビルと戦っていた。ドゥビルが放つ攻撃は一撃一撃がかなりの重量だったが、ソーガはレオルの大剣で戦っていた。

ドゥビル「さすがは、ヴェイロンとサイファーの二人を倒しただけはあるな」

ソーガ「お前には褒められても嬉しくはないぜ。スバル姉ちゃん。急いで中の制圧を……俺はこの筋肉野郎を倒す。」

スバル「分かった。フェイトさん行きましょう」

フェイト「うん、頼んだよ。ソーガ」

スバル達は急いでこの場から抜けだそうとした。だが、その前にアイリスが立ちはだかった。

アイリス「ここは通さないわよ。管理局」

エリオ「この人、あれだけソーガの攻撃を受けてまだ動いてるなんて………」

アックア「諦めろ。その傷では……死ぬぞ」

アイリス「あら、ありがとう。でも、私には大切な作戦があるのよ。フッケバインが使うリアクト。あれはかなり強力よね。でも、私にも、いえ、私達神機人にもあるのよ。最強の力が。」

アイリスは持っていた刀で自分の体を突き刺した。アイリスの体からは血が流れたが……アイリスは笑っていた。

アイリス「見せてあげるわ。水の神機人の本来の姿を………血流武装」

刀と血がアイリスの体を包み込んだ。そして、アイリスの体は水色の鎧を着た騎士に変わった。

アイリス「これで私の勝ちよ。管理局。ソーガ。フッケバイン」

トーマ（やめてくれ、）

トーマは遠く離れた部屋で聞こえ続ける戦いの嵐を聞いていた。その結果、トーマの心は闇に包まれていた。

トーマ「もうこれ以上、やめろぉぉぉぉぉぉぉぉぉ」

その瞬間トーマは拘束を破り、ディバイドゼロを発動させた。

ヴァルフラムにいたはやてと土御門もディバイドゼロの効果を受け、気絶しかけていた。

はやて「これは………」

土御門「つぅ、こりゃ、命を持って行かれる。ルキノは？」

はやて「ルキノ。ルキノ！起きいや」

土御門「誰かが発動させたんや。」

空中で移動要塞を攻撃していたなのは、ヴィータ、スターもその影響を受けていた。

なのは「ヴィータちゃん。スターちゃん。大丈夫？」

ヴィータ「駄目だ。一回戻って回復を待つしか無い」

スター「この生命を持って行かれる感じは……………きついです」

そして移動要塞の艦首にいたステラとフォルティスも何とか影響を逃れていたが……

フォルティス「ステラ、起きてください。起きないとこの船は落ちてしまう」

ステラ「うぅ、」

そしてソーガたちもその影響を受けていた。

ソーガ「これは……かなりきついな」

ヴェイロン（これが姉貴が探していたゼロドライバーか。確かにこ

れは凄いが……）

スバル「早く、視覚を取り戻さないと………」

スバルが必死に回復しようとしていると、その前にアイシス、リリィ、イリスを抱き抱えたトーマがいた。

トーマ「お願いします。彼女たちを救ってください」

スバル「その声……トーマ？」

ソーガ「おい、トーマ。何があったんだ。」

トーマ「兄さん。スゥちゃん？ごめん。三人を頼んだよ。」

ソーガ&トーマ05　降臨神機王　フルセイバーモード（前書き）

ついに神機王が登場します。その強さはかなりやばいと思います。
さらにソーガの新たな力が登場です。

ソーガ&トーマ０５　降臨神機王　フルセイバーモード

トーマはリリィとアイシスとイリスを倒れているスバルに任せた。

トーマ「ごめん、スゥちゃん。この子たちを頼んだよ。」

スバル「待ってよ。トーマはどこ行くの？」

トーマ「………もう俺の体はいろんな人に迷惑が掛かるようになっちゃったんだ。制御もできない。だから………ここから飛び降りて……死ぬんだ。」

ソーガ「ふざけんなよ。トーマ。」

ディバイドゼロの影響を受けて、獅子宮の大剣を杖替わりにしながら立ち上がるソーガはトーマを睨んだ。

ソーガ「勝手に死のうとしやがって………そんな事で解決できるのか？お前がやりたかったことは………」

トーマ「………ごめん。ばいばい。」

トーマはそのまま移動要塞から飛び降りた。ソーガは宝瓶宮のベルを召喚し、自分の体だけを回復させた。

ソーガ「あの馬鹿！！スバル姉ちゃん。アイツを止めてくる。」

ソーガは飛翔魔術を使い、トーマを追った。

ソーガはトーマを追うがその前に立ちはだかる一人の男がいた。

ソーガ「邪魔するなよ。神機人。」

ヴィクサー「どうやら、ディバイダーが一人落ちてきたようだな。アレは我々が回収させてもらう。いいな」

ソーガ「いいなじゃねぇよ。アイツはトーマは物じゃない。アレ呼ばわりするな！」

ソーガは獅子宮の大剣でヴィクサーに斬りかかった。だが、ヴィクサーはそれを小指一本で受け止めた。

ソーガ「なっ！」

ヴィクサー「前に言ったな。お前に勝てるのはこの私だけだ。いや、言葉を変えよう。覚醒した私に勝てるのは誰もいない。」

ヴィクサーは左腕のマシンガンから銃弾を発射させた。ソーガは大剣でそれらを防ぎ、後ろに回り込み、ヴィクサーの背中を斬った。

ソーガ「後ろから卑怯だと言うなよ」

ヴィクサー「言わないさ。私も上から攻撃させてもらうから。」

その瞬間、空からソーガに向けて雷が振った。雷はソーガを直撃させた。

ソーガ「ぐああああああああああああ」

ソーガは何とかその雷から脱出するが………今度は両足が凍らせられた。

ソーガ「これは………」

ヴィクサー「次はしっかり受けよ。雷神」

今度の雷はさっきの雷と違って巨大なものだった。ソーガはそれを喰らい、気絶しかけていた。

ソーガ「がはっ、お前は……雷の神機人？」

ヴィクサー「いや、私は天の神機人。いや神機王と言ったほうがいいな。この空が世界中にある限り私は最強だ。」

ソーガ「そうかよ。それなら、ギル・モードフルセイバー」

ギルから十一個の玉が出現し、ソーガの体に入り込んだ。そして、蒼い鎧と背中に白いマントを羽織、手には蒼い大剣が握られた姿に変わった。

ソーガ「終わらせよう。奥義　十一宮聖王斬！！」

大剣が蒼く光りだすと巨大な刃に変わり、ソーガはヴィクサーを斬りつけた。『十一宮聖王斬』は全魔力を使って刃に変え、相手を確実に仕留める奥義だった。だが、その確実と言う言葉は次の瞬間、消えた。

ヴィクサー「その程度で、終わりか。」

ヴィクサーは光の刃を片手で受け止めていた。そして少し力を咥えた瞬間、光の刃は砕け散った。そして、

ヴィクサー「この世に最強の存在は一人で十分だ。天魔剣」

左腕のマシンガンがみるみるうちに一本の剣に形を変え、ヴィクサーはそれを構えた。

ヴィクサー「そして、奥義というのはこういうものだ。天破魔剛破

！！」

天魔剣から一本の線が伸び、それがソーガの体を貫き、体中を駆け巡った。

ヴィクサー「体の中が全て切り刻まれる痛み、味わってから死ね。」

そして、ソーガの体を切り刻んだ線は体から出ていき、消えた。ソーガはそのまま、海へと落ちていった。

ヴィクサー「さて、次はディバイダーか」

救出されたイリスはシャマルに介助されていたが、ソーガがやられたことを感じ取った。

イリス「ソーガくん？」

ソーガ&トーマ０５　降臨神機王　フルセイバーモード（後書き）

次回はトーマの救出編が始まります。

ソーガ＆トーマ０６　ただ友のため、愛する者のため（前書き）

今回からトーマの救出編がスタートです。そして、ソーガの安否は
……

ソーガ&トーマ06　ただ友のため、愛する者のため

救出されたアイシスはスバル達に訴えかけていた。

アイシス「何で真っ先にトーマを助けなかったんですか？トーマはきっとスゥちゃんさんが助けに来るのを待ってます。確かに向こうの船から私達をたすけてくれたのは感謝してますけど、トーマは今は一番つらい時です。だからこそ、スゥちゃんさんが行くべきだったんじゃないんですか？」

スバル「うん、だけど……」

アイシス「訳は聞きません。私は今からトーマを助けに行きます。」

アイシスがヴァルフラムから外に出ようとした瞬間、イリスがアイシスの腕を掴んだ。

アイシス「イリス。イリスも私を止めるの？」

イリス「ううん、私は……ソーガくんを助けに行きます。だから、少しだけ一緒に行かせてください」

アイシス「ソーガはどうかしたの？」

イリス「今にも、命をなくそうとしてます。だから、助けます。」

シャマル「待ちなさい。貴方もかなりのダメージを負ってるし、魔導師じゃない人が外に出ようとしたら……」

イリス「大丈夫です。私は……化物ですから。ロストマジック『十二宮魔法』のマスター権限を私に……」

イリスが悲しそうな笑顔を浮かべた瞬間、イリスの両腕に十一の星座の紋章が刻まれた。そして……

イリス「行こう。アイシス。」

アイシス「うん、」

アイシスとイリスの二人は一緒に外へと出るのであった。

先に向かっていたなのははスターから連絡を受けていた。

なのは「スターさん？どうしたの？」

スター『今、やっと目を覚ましたところです。状況は把握しました。私もトーマの救出へ向かいます。』

なのは「うん、ありがとうね。」

スター『いえ、それと彼らが合流します。』

なのは「彼ら？」

スター『はい、心強い仲間です。』

そして、トーマは銀十字からこちらに向かってくる人物たちに気がついた。

『敵性反応』

（だれ？来ちゃダメだ。俺に近づくと……）

『敵性反応を排除します。Silver Stars Hundred million』

トーマの持つ刀剣から魔力弾が発射された。そして、トーマの周り

には銀十字のページが包み込み、その魔力弾をトーマに向かってくる敵機に向けて雨のような魔力弾が襲いかかった。

アル「うおおおおお、なんだアレは？」
フォルティス『気をつけてください。いくら何でもアレを食らったあなただって死にます。』
トーマを追っていたアルもトーマの攻撃にロックオンされていた。
だが、アルは……
アル「ええい、こんなもんちまちま避けるんじゃなくって、全部撃ち落とせばいいんだよ。リアクト　『L／R・フルバレル』」

なのは、アル、アイシス、ドゥビル、スターを狙っていた魔力弾は全て爆散したが……誰一人落とされていいなかった。
レイジングハート『回避成功』

なのは「さぁ、行こうか』

パフィ『大丈夫ですか？』

アイシス「な、なんとか……」

スター「さすがに数が多すぎましたね」

三人は何とか回避に成功したが、アルは……

アル「いいもん撃つじゃねぇか。小僧、どうせ、見えないだろうが、聞こえないだろうが、よく見て、よく聞け。お前は私達と同じ毒の血が流れてるんだ。こっちに来いよ」

アルの両腕には大量の重火器が装備されていた。だが、次の瞬間、アイシスがアルの顔をぶん殴った。

アイシス「トーマのところには行かせないよ」

アル「てめぇもしつけェな。ペッタンコ胸」

アイシス「その呼び方をやめろ」

アルとアイシスが言い争いをしていると、なのはとスターはトーマの所へたどり着いた。

なのは「あれ？私達が一番？」

スター「そうみたいですね」

アイシス&アル「「しまったぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁーーーーー」」

なのはとスターはトーマに向かって問いかけた。

なのは「久しぶりだね。トーマ」

スター「私のことは覚えていますか？トーマ」

トーマ「…………」

トーマは黙ったまま、二人に襲いかかってきた。だが、トーマとなのは達の間に5つの影が現れた。

レル「悪いけど、こいつは管理局やフッケバインには渡せないよ」

ベルドラス「ヴィクサーの命令。護る」

アイリス「さあ、私達と戦うか。殺されるか選びなさい」

リオン「王の命令は絶対だ。」

ルア「砕けて散りなさい」

現れたのは神機人全員だった。神機人全員はなのは達に武器を向け、なのは達は絶体絶命だと思ったが、さらなる来訪者がやってきた。

ティス「赤火繚乱」

アーク「ダークネスブレイカー」

炎の刃と黒い魔砲が神機人たちに向かって襲いかかった。そして、現れた来訪者は……

ティス「やはり、封印された機械が動き出していたか」

アーク「なぁ、あの刀を持った女」

ティス「あぁ、そうだな。似ている。」

なのは「お二人とも来てくださってたんですか？」

ティス「うむ、こやつは私達がやります。あなた方二人は彼を……」

アーク「キャロからの命令だ。十分に暴れさせてもらうぜ。」

神機人ＶＳオルドレイクの同志の戦いが始まるのであった。

そして、ソーガは、海に浮かびながら血を流していた。そこにイリスが現れた。
イリス「ひどい傷だね。待ってて、直ぐに直すから、宝瓶宮のベル」
ベル「あれ？イリスちゃん。珍しく私達を使ってるんだね」
イリス「ごめん、その使ってるって言葉は嫌いなの。と今はソーガくんを助けて」
ベル「了解。」
ベルがツボから光をソーガにふりかけるとソーガの傷はある程度直した。だが、完全ではなかった。
ベル「傷がひどいし、イリスの今の魔力じゃ完璧にはできないよ」
イリス「うん、分かってる。だからこそ、私はソーガくんと一緒に戦う。ギル、起きてるよね」
ギル『はい、何とか……』
イリス「それじゃあ、モードパラディン。やるよ。」

ギル『はい、』

イリス「ユニゾン・イン。ギル・モードパラディン」

ソーガとイリスから真っ白な光が包み込むのであった。それは、ソーガが復活する証であり、神機王に対抗する力でもあった。

トーマ07　ガンズブレイズ（前書き）

今回はなのはｖｓトーマです。

トーマ07　ガンズブレイズ

神機人の相手をアークとティスの二人に任せたなのははトーマと対峙していた。

なのは「トーマ！ 久しぶりだね。覚えている」

なのはは微笑みながらトーマに話しかける。だが、トーマにはその言葉は届かなかった。

銀十字『接敵確認。近接戦闘機能。稼働開始』

トーマはゆっくりとなのはに襲いかかる。なのはは新武装フォートレスでトーマの攻撃を防ぐ。

銀十字『識別不明の防御膜および耐久装甲を確認。結合分断の解析開始』

なのは（速いな！ 近接戦闘のステップインだ。防御も無効化してくる。受けに止まったら止められない）

なのは「エクサランス」

フォートレスを発射させ、トーマの注意を逸らすと、なのはは魔砲を放つ準備に入った。

なのは「ごめんね。ちょっと痛いけど、我慢して、『エクサランスカノンヴァリアブルレイド』」

全フォートレスから放たれる魔砲がトーマに直撃させたなのはだが……トーマはほとんど無傷だった。

トーマ『誰だか分からないけど、俺に近づかないで、今ならまだ間に合うから、俺はもう誰も殺したくないから』

トーマは涙を流しながら訴えかける。なのははそれを見てどう止めるか考えていると、横から何発もの銃弾が襲ってきた。なのはフォートレスでそれを防ぐ。

アル「おう、公務員。自慢じゃねぇーが、あたしゃてめぇらが大嫌いだ。てめぇーもだぺったんこ。これ以上あたしらに関わるな。てめぇらボンクラにそいつは救えねぇんだ」

アルはアイシスに向けてミサイルを何発も発射させる。

アイシス「パフィ」

パフィ『おまかせください。迎撃します』

アイシス「『白の香NO7』」

パフィから白い蝶が何十匹も現れた。するとアイシスの周りに蝶が舞うとアルのミサイルが弾道をそらし、不発させた。

アイシス「白の香。ミスティック・フライト。効果は誘導弾の誘導妨害。弾体の炸裂妨害。誘導弾もロケット弾もあたしには通らない」

アル「ハッ、それならこいつで蜂の巣だ。」

アルがアイシスにガトリングを向けると、アルに後方から黒い鳥が迫ってきた。

アイシス「黒の香『ハミングバード』」

その瞬間、黒い鳥が爆発した。アルはなんとかそれを抜けるが……さらに黒い鳥が迫ってきた。

アル「思い出した。こいつの荷物確認した時に、化粧品に偽装した薬品……こいつ爆薬使いだ」

アイシス「今はあたしに友達を助けさせて」

その時だった。突然現れたドゥビルがアイシスに凶刃を向け、アイシスはその凶刃を受け、海の下に落ちていった。

アル「ビル兄」

ドゥビル「無事か？」

アル「殺ったか？」

ドゥビル「いや、首を落とすつもりだったが意外と頑丈だったか。殺るまでにはいかなかったが………確実に戦闘不能までに追い込んだ。」

なのは「まずいね。黒髪ちゃん落とされちゃった。確実に犯人二人がこっちに向かってきてる」

レイジングハート『向かってきますね』

なのはが警戒のためにフォートレスを周りに盾として向けるが……

……ドゥビルは一瞬でなのはの背後に回った。

なのは「短距離瞬間移動！」

ドゥビルの刃がなのはに迫ってきただが、その瞬間、フェイトがドゥビルの攻撃を防いだ。

フェイト「お待たせ」

なのは「フェイトちゃん」

フェイト「ここは私がやるから」

トーマ08　凶鳥の首領。遅れたヒーロー（前書き）

今回はフッケバインのリーダーの登場です。そしてついに当麻の登場です。

トーマ08　凶鳥の首領。遅れたヒーロー

なのはの危機に駆けつけたフェイト。

ドゥビル「邪魔をするな。そうすれば戦わずに済む。」

フェイト「そういう訳には行きません。」

ドゥビル「残念だ。リアクト」

ドゥビルは斧で自分の腕を傷つけるとリアクト状態に入った。

ドゥビル「無駄に命を散らすことはなかろう」

フェイト「罪を重ねる人間を見過ごすことはできない。そのための私達。そのための魔法」

ドゥビル「空しいな。ならばここで砕けて消えろ」

ドゥビルのリアクト『ディバイダー695　ランゲ・リアンクテッド』はドゥビルの体に黒い鎧を身にまとわせた。その姿はまさに怪物だった。

なのはとトーマは何度もぶつかり合いを繰り返していた。何度もぶつかり合う中、なのはのフォートレスが一つ砕け散った。

トーマ『俺に……近づかないで』

なのは「子供の頃からの経験でね。泣いてる子供の言うことは言葉通りには受け止めないの、それにね。今のトーマを見て、私の大好きな人はきっとこう言う。誰かを殺す前にお前を苦しめる全てを……その辛い気持ちを……そんな幻想ぶっ殺してやるって………」

なのはとトーマは再びぶつかり合う。

そして移動要塞を追い詰めるヴァルフラム。はやては外に出ると移動要塞に向けて魔法を発動させようとしていた。

ルキノ『本部及び本局より、八神部隊長の技能封印開放許可。『ヘイムダル』起動承認。八神司令打てます』

はやて「承認了解。『海より集え。水神の槍、彼方より来たれ銀雪の吐息、逆巻き連なり、天に坐せ』」

移動要塞の上空に巨大な大氷塊が浮かび上がった。それを見たフッケバイン一同は………

ステラ「な………な………」

サイファー「巨大な氷？」

はやて「海水を汲み上げて作った大氷塊。いかなる『防御無効』も関係あれへん。抵抗のしようのない物理重量。進路を変えても無駄やで、もう十分に射程距離範囲や」

フォルティス「魔法といいはれば、なんでもありな連中ですか？」

ステラ「ちょ、ちょっとそっちのおかしな喋り方の司令官。そんなの落としたら、下の被害が……」

はやて「心配してもらわんでも、安全確認はクリア済みや。命中した後砕いて雪にして散らすから津波の心配はあらへん。警告や、その艦止めて降伏しなさい」

ステラ「ぐぬぬ」

サイファー「心配するな。ステラ。この程度、私が切り裂く。」

サイファーが外へ飛び出し、大氷塊を切り裂いた。その瞬間、氷塊が砕けた。

サイファー「甘いな。この程度の攻撃、対策済みだ。」

はやて「甘いのはそっちやフッケバイン。ブラスター3。ヘイムダル再氷結！！槍陣を成せ、白銀の破槌。ヘイムダル・ファランクスシフト」

はやては大氷塊を再生させ、さらにいくつもの氷解を移動要塞に向けた。

はやて「抵抗は無駄や。砕かれるよりも再生のほうが速い。最終警告や、降伏しなさい」

この瞬間、特務六課全員が勝ったと確信していた。だが、それは次の瞬間砕かれた。それは突然はやてが背後から刺された。

カレン「そんじゃ、術師をやっつければ、片が付く。はい、おつかれー」

そこに現れたのは黒髪の女性だった。その女性は黒い刀と銀十字に似た本を持っていた。

カレン「というか、やりすぎだよ。お嬢ちゃん。あんなの本当にやられたら本気で殺さなきゃいけなかったじゃない。このフッケバイン一家。首領、カレン・フッケバインが」

カレンが注意を逸らしていると背後からヴィータとエリオの二人がカレンに攻撃を仕掛けた。だが、その攻撃はカレンの刀を折る程度で終わった。魔術書から何枚ものページがとび出すとエリオとヴィータの二人を切り裂いた。

カレン「さてと、」

アックア「うおおおおおおおおお」

神裂「七閃！」

アックアと神裂の二人がカレンに攻撃を仕掛けた。だが、カレンはその攻撃を折れた刀で受け止めた。

アックア「くっ、」

カレン「なるほどね。あんたらが噂の聖人か。さすがにそんじょそこいらの魔導師とは違うね。でも、私には………」

土御門「まだ終わってないぜ。」

カレンに向けて、『黒の式』を放つ土御門。だが、カレンはそれを折れた刀で軽く受け流した。

カレン「だから、君らじゃまず勝てないよ。ほら、私らもう撤退するからさ。」

土御門「おっと、その前にあんたのその幻想（つよさ）―一つだけぶっ殺させてもらったぜ。」

カレン「ん?」

カレンが後ろを振り向いた瞬間、誰かの拳がカレンの顔面を殴り抜けた。するとカレンの持っていた折れた刀が確実に破壊された。

カレン「おっと、どうやらものすごいの来ちゃったみたいだね。」

そこに現れたのはつんつん頭の少年。上条当麻だった。

当麻「悪い。遅れた。」

カレン「噂の幻想殺しか。遊んであげたいけど……どうやら、もっと凄いの来ちゃってるみたいだね。みんな、急いで撤退。特務のお嬢ちゃんも部下を下がらせたほうがいいよ。」

はやて「えっ、」

その瞬間、戦闘空域にいくつもの雷が鳴り響いた。そして上空には神機王の姿があった。

アイリス「悪いけど、ここからは神機王の攻撃だけで済むわ。」

神機人は全員撤退した。

アーク「おい、アイツは」

ティス「オルドレイク以上の魔力。まさか……」

なのは「何？」

フェイト「明らかに規格外すぎるよこの魔力」

アル「ビル兄」

ドゥビル「カレンのいう通りだ。小僧を連れ戻すという任務はもう無くなった。撤退するぞ」

フッケバインも移動要塞へと去っていった。そして、ヴィクサーはカレンを睨んでいた。

ヴィクサー「久しいな。小娘」

カレン「封印して殺ったのに、またよみがえるとかしぶといね」

ヴィクサー「今はまだ完全体ではない。いずれ決着を付ける。」

ヴィクサーはトーマの所へと向かっていった。

なのは「来る。」

フェイト「この状況でアイツとは………」

トーマ『…………』

ヴィクサー「もらうぞ。ディバイダーを………」

ソーガ「やってみやがれよ。王様」

ヴィクサーがトーマに触れようとした瞬間、突然、白い光がヴィクサーをはじき飛ばした。

ヴィクサー「ぬぅ、」

ソーガ「さぁ、リターンマッチだ。」

そこには白い鎧に、白い剣、そして白い翼を生やしたソーガの姿があった。それは全ての十二宮を合わせたソーガの究極のフォーム。『フルセイバーパラディン』だった。

ソーガ08　ソーガvsヴィクサー　前編（前書き）

今回と次回はヴィクサーとの戦いになります。トーマ救出編が終わったらそのあとは少しオリバナやります。

ソーガ０８　ソーガｖｓヴィクサー　前編

強襲してきたヴィクサーの前に究極フォームを身につけたソーガが立ちはだかった。

なのは「ソーガくん。」

ソーガ「なのはさん、フェイトさん。こいつの相手は俺がやります。その間にトーマを……」

なのは「うん、それにソーガくんとトーマの帰りを待つ人ももうすぐこっちに来るから……」

ソーガ「分かった。」

なのは、フェイトはトーマの救出を開始した。そして、ソーガはヴィクサーと対峙した。

ヴィクサー「貴様はさっきの闘いで学ばなかったのか？既に貴様は私に負けているということを………絶対に勝てないということを……」

ソーガ「お前こそ、絶対を使う以上、言葉通りにやってみやがれ。」

ヴィクサー「いいだろ。」

トーマを追うなのはとフェイト、トーマは二人に向かって攻撃を仕掛けようとした。だが、トーマの周りに黒い魔力球がいくつも現れ、トーマを囲んだ。

スター「マテリアルH。『黒の包囲網』この魔力球は貴方が倒れるまで追尾します」

なのは「スターちゃん。」

スター「すみません。このフォームになるにはかなりの時間がかかるので………」

フェイト「ううん、いいタイミングだよ。それに銀十字の弱点も分かってきたところだよ。スター、マテリアルチェンジしてもあの魔力球は残る?」

スター「はい、残ります。」

フェイト「それじゃあ、なのは、スター、ページ削るの頼んだよ」

なのは「うん、任せて、」

なのははシールドビットを展開させ、トーマの注意を逸らす。そんな中、スターは集束砲の準備に入った。

スター「行きます。『ルシフェリオン・ブレイカー』」

なのは「『エクサランスカノン・フルバースト』」

なのはとスターの集束砲がトーマ目掛けて放たれた。トーマは銀十字のページを利用し、防御するが………

なのは「あの本から出る攻撃と防御は無限じゃない。削れるだけ、削る」

スター「はい」

一方ヴァルフラムでは……

はやて「つぅ、上条さん。どうやってこっちに来れたんや？」

医務室で傷の手当を受けるはやては当麻がどうやってここまで来れたかが気になった。

当麻「ん、それは………」

当麻は少し言いづらそうにしていた。そしてふっと何かを思いついた。

当麻「そ、そうだ。まだ戦闘が続いてるから、俺も参加しに……」

当麻がそう言って医務室から出ようとした瞬間、医務室の扉の前に立っていた人物に蹴られ、壁にぶつかった。

当麻「痛ぅ」

「全く、君が今更行ったところで何が出来るっていうんだい？折角私が装置とやら使ってちょうどいいタイミングで駆けつけるようにしたのに………」

医務室に入ってきたのは金髪セミロングで、まだ幼さが残っている

少女だった。少女ははやてを見てこう言った。
「初めまして、別世界の魔導師。今回、その男を連れてきた、バードウェイだ。」

ソーガとヴィクサーのぶつかり合いはまだ続いていた。
ヴィクサー「天魔豪獣破！」
天魔剣から何十匹もの獣がソーガに襲いかかるが、ソーガは白い剣でそれらをなぎ払った。
ヴィクサー「ほう、さっきとは比べものにならないくらい強くなっているな。」

ソーガ「このフォームはなるべく使いたくなかったんだ。」

ヴィクサー「強力すぎて、全てを壊すのが怖いか？そんな考えだからお前はまだガキなんだ」

ソーガ「違うな。こいつは、アイツが、イリスが命をかけて使用している力だ。あまり長引かせたくない。全力で……お前を斬る！」

ヴィクサー「命がけか。ならば……私も命をかけよう。但し……下僕のな。」

ヴィクサーが右腕を軽く振ると、ティスと対峙していたアイリスの体から何かが貫いた。

アイリス「えっ、」

ヴィクサー「まずは負け続けている貴様の命。いや、元となった命があるか。そうだな。その力を貰った。」

ヴィクサーがアイリスのコアを吸収すると、ヴィクサーの背中から青い羽根が生えた。ソーガは急いで海へ落ちようとするアイリスを助け、抱き抱えた。

ソーガ「おい、」

アイリス「ヴぃ、ヴィクサー」

ヴィクサー「さて、私も他人の命を掛けた。さぁ、最後の闘いだ」

ソーガはアイリスをティスに預けて、ヴィクサーに向けて、剣を構

えた。

ソーガ「イリスは他人じゃない。一心同体だ。」

ソーガ０８　ソーガｖｓヴィクサー　前編（後書き）

次回の更新はちょっと遅れます。しばらくＶｉｖｉｄに集中しようと思います。

ソーガ09　ソーガvsヴィクサー　後編（前書き）

というわけで今回で決着が付きます。次回は9月12日くらいにな
るかもしれません。理由は後書きで、

ソーガ09　ソーガvsヴィクサー　後編

アイリスの力を奪い、さらに力を付けたヴィクサー。ソーガは剣を構えた。

「これ以上、お前がやることを見過ごすことができない。」

「来い。十二宮を宿し魔導師。」

二人は同時に動き出し、ぶつかった瞬間巨大な衝撃波が起こったのだった。

なのはとスターは銀十字から出るページを全て削りきろうとしていた。だが、トーマは攻撃をわざと受け、なのはが使うシールドビットを全て破壊し、なのはに向かって突撃した。

「シールドが残り一個。スターさん。離れていて」

「はい」

なのははトーマの攻撃を全て受けきろうとするが、受けきれずにバリアジャケットの武装などが切り刻まれる。そして、トーマのトドメの一撃がなのはに向かって放たれようとしていた。だが、なのはそれを最後のシールドで受けきろうとした。

「これを受けきれば……」

シールドに突き刺さった刃がシールドを破壊しようとしていた。その瞬間、どこからともなくスバルが現れた。

「スバル！」

「はい。『ソード・ブレイク』」

スバルはディバイダーの刀剣の刃を砕き、その瞬間、スターが魔砲を放った。

「なのはさん。無事ですか？」

「ナイスタイミングだよ。スバル。」

「間に合ってくれてありがとうございます。スバル」

「スターもお疲れ。ねぇ、スバル。トーマは？」

心配するなのは。だが、トーマを包み込んだ煙が晴れた瞬間、トー

マがなのは達に向かって砲撃を撃った。スバルとスターがそれを防ぐ。

『ディバイダー破損。白兵戦困難。飽和射撃で殲滅します』

飽和攻撃を放とうとする銀十字。その時だった。トーマの頭上から黒い鳥が何匹も現れ、トーマを白い煙で包み込んだ。

『強可燃物による煙幕。緊急回避』

銀十字がそう警告した瞬間、爆発が起こった。するとなのはたちの近くにはアイシスがいた。

「黒髪ちゃん大丈夫だった？」

「生憎と頑丈だけが取り柄なんで、」

「そう膨れないで、直ぐに助けられなかったから……」

「別に膨れてないです。」

「でも、本当に危ないことだからね。」

なのは、スバル、アイシスのやり取りを見ているスターは思わず笑ってしまった。

「何ですか。」

「すみません。こんなやり取り。凄く久しぶりで……」

スターが昔のことを思い出していると、突然気絶したトーマの方から声が聞こえた。

一方、ソーガvsヴィクサーは……何度目かのぶつかり合いが続いていたが、ソーガのほうがかなりダメージを負っていた。

「十二宮ではこの私には勝てないらしいな。」

「はぁ、はぁ、流石に…………ながらだと、厳しいな。」

ヴィクサーは驚いていた。この絶望的な状況でソーガがこんな事を

言うとは思ってもいなかったからだ。

「貴様は今なんと……」

「流石に………手を抜きながらだとキツイな。っていったんだよ」

「貴様、この状況で手を抜いていたのか！」

「あぁ、これを作るためにな。辺りを良く見ろ」

ヴィクサーは辺りを見渡すと、ソーガとヴィクサーの周りに十二個の巨大な魔力玉が現れていた。

「これは……まさか、これを使って俺を倒すというのか。無理だな。たかが収束砲で私を……」

「あぁ、そうだな。本場のスターライトブレイカーみたいにあたりに霧散した魔力をかき集めるのは俺には苦手でダメだ。だから、このフォームでの全十二人の魔力をこうやって集め、そして………さらにこの剣に収束させる。」

ソーガがそう言った瞬間、十二個の魔力玉がソーガの剣に集まった。そしてソーガの手には巨大な魔力刃できていた。

「収束砲ならぬ、収束剣。喰らえ、アルティメットスター」

「くっ、天魔の剣よ。この体にある全ての魔力を吸い取れ、ダークネス」

「ライト………」

「インフィニット………」

ソーガの剣には巨大な魔力刃、ヴィクサーの剣には暗黒の刃が集まっていく。

「ブレイバーーーーーーーーーーーーーーー」

「ブレイバーーーーーーーーーーーーーーー」

二人の最大の魔砲がぶつかり合い、そして、どちらも全魔力をかけていた。

「この神機王が負けるはずがない。死にさらせぇぇぇぇぇぇ」

「これは十二人の思いがこもった魔砲だ。一人の力で負けるわけはないんだぁぁぁぁぁぁぁ」

二人の剣がぶつかり合う中、突然、ヴィクサーの右肩が切り裂かれた。

「馬鹿な。誰が………」

「全く復活しても厄介なんだから……そこの坊や。決めな」

「き、貴様はカレン・フッケバイン」

助けに入ったのはフッケバインの首領、カレンだった。

「誰か知らないけど、助かったぜ。お姉さん。くたばれーーーーー

ーーーーーーーー」

ソーガの刃がヴィクサーの刃を消し去り、ヴィクサーを包み込んだ。

そして激しい爆発が起きるのであった。

「はぁ、はぁ、さすがに……魔力が……そういえば、さっきの……

…」

ソーガがカレンの姿を探すが、既にそこには誰もいなかった。

「フッケバインもいなくなってるし……あとは……トーマだけだ。

」

ソーガがトーマの所へ向かおうとした瞬間、ヴィクサーを包み込んでいた煙が晴れ、そこには……ボロボロのヴィクサーがいた

「よくもこの俺を……」

「口調がおかしくなってるぜ。」

「ぐぅ、この体も限界だ。早く完全な姿に……次会うときは……

完全なる姿で貴様を殺す。フッケバインも。世界も、お前の父親がやろうとした次元破壊を……覚悟しろ。ソーガ・ベルリッツ」

ヴィクサーはそう言い残し、姿を消した。

「完全に倒せなかったか。つぅ、早く……トーマを……」

『無理しないで、ソーガくん。後は私がやるから』

「いや、大丈夫だ……と言いたいけど……トーマがいる所まで連れていってくれ。流石に……パラディンは疲れた。」

『分かった。少し飛ばすから』

ソーガとイリスはトーマのところへと向かうのであった。

『ドライバー保護のため、緊急転移モードに入ります。』

「フェイトちゃん」

それを聞いた瞬間、なのはがフェイトの名を呼んだ。フェイトは銀十字の本目掛け、魔力弾を撃ち、さらにジェットザンバーで切り裂いた。だが、トーマを包み込むページがまだ残っており、その攻撃を防いだ。

「くっ、」

『緊急転移始まり…………』

「させるか。全てを撃ち落せ。双魚宮のリヴァイ」

『任せろ。処女宮。』

『うん、アクアバスター』

ソーガの魔砲が銀十字を破壊したのだった。

「ソーガ、って、凄いボロボロだよ」

「スバル姉。ごめん。ちょっと魔力切れが……」

「ソーガくん。無理し過ぎだよ」

「あなたは本当に無茶しますね」

ボロボロのソーガを見て心配するなのは達。だが、銀十字の転移はまだ止まっていなかった。

ヴァルフラムの医務室では銀十字に必死に呼びかけるリリィがいた。

『待っていて、銀十字。今この私が……『シュトロゼック』が行くから』

ソーガ０９　ソーガｖｓヴィクサー　後編（後書き）

次回の更新はかなり遅れます。理由は今回の話で現在出てる巻の内容がおわったためです。とりあえず、１０日あたりに届くはずの最新刊限定版が出るのでそれまで待ってください。

トーマ09　それはとても温かなもの（前書き）

今回はトーマの過去話です。トーマとスバルの出会いをやります。

そしてソーガとの関わりも……

トーマ09　それはとても温かなもの

初めて会ったのは、もう何年も前だった。

鉱山の事故で一人になり、事故に巻き込まれ、殺された村の人の仇のためにトーマはボロボロのナイフを手にいつか犯人を殺すために体を鍛えていた時だった。近くの湖にテントを張った一人の女性と、トーマと同じくらいの男の子がいた。

「地元の子ー？ご飯作りすぎちゃったんだけど、よかったら食べない？」

びっくりした。気づかれた事と声をかけられたこと、それから『作りすぎ』にも程があるって事も。女性の身長を超えた大きな鍋の中に溢れんばかりの食材が入っていた。

「あんまり気にしないほうがいいぞ。スバル姉は結構食べるほうだから…………」

男の子がそんな事を言っていた。彼はあの人の弟なのだろうか？

「どう？おいしい？」

「美味い」

「スバル姉、俺、おかわり。」

「もう、ソーガは……所で君は近所の子？」

スバルと呼ばれる女の人がそんな事を聞いてきた。俺は食べながら答えた。

「遠く、北の鉱山町にいたから」

「ひとり？」

「ひとり」

そんな事を答えると、ソーガと呼ばれる男の子は、ふっと立ち上がった。

「スバル姉。ちょっと行ってくる」

「うん、分かった。」

突然森の中に入っていくソーガ。一体どうしたのだろうと思った。

「あの子はソーガ。あの子も君と同じ一人なんだよ」

「ひとり？お姉ちゃんがいるじゃん。」

「今はね。でも少し前はずっと一人ぼっちだったの。両親も、友達もいなくって、唯一良くしてくれた人達も、あの子は自分から離れていったの」

「なんで？」

「自分がいるせいでみんなに迷惑を掛けるんだって思ったからだよ。でも、今はこうして一緒にいることであの子の心も救えたらいいかなって思ったの。でも、今回は私の心を安らぐためかな」

「何か悲しい事あったの？誰か死んだ？」

「………うん、助けなきゃならない人が死んじゃったの。あたし、消防士さんなんだけどね。ものすごくおっきな火事があって………仲間たち皆でたくさん助けたんだけど、だけど、たくさん助けられなかった人がいたの。大人も子供も………沢山」

「それで落ち込んでるの？」

「『助けたかった』って思ってる。だから本当は一人で鍛え直そうと思ってたんだけど、ソーガも私のことが心配で一緒に来てくれてるの。だから、一緒に鍛えて、もっと速くなって、もっと強くなれば、きっともっとたくさん助けられる。助けてって泣いてる人をちゃんと助けてあげられるように」

今にも泣き出しそうなその笑顔は、強がってるんだって事が俺にもわかった。だからか、俺も柄にもなく身の上話なんかした。そしたらうんと優しくしてくれた。

故郷の事故の追加調査依頼、俺の身元の確認と縁者の捜索。保護の申請と居場所づくり、

彼女――スバル・ナカジマ防災士長こと、『スゥちゃん』のおかげで、故郷を無くした浮浪児は随分とあたたかな保護施設に入ることが出来た。あの時あったソーガも遊びに来てくれたりした。彼もまたここにいたことがあったらしい。そして彼の友達であるスターと言う女の子も遊んでくれた。

ナカジマ家のみんなは、いつも優しくしてくれた。それから、

「もう少ししたら学校に行くでしょ、良かったらミッドの学校にしない？」

「ミッドの？でも都会で一人暮らしはなんか不安かも」

「だからさ……良かったらうちの子にならない？って」

スゥちゃんがそんな事を言う。

「お前は優しい、いい子だ。皆分かってる」

チンクさんがそう言ってくれる。

「お前が来てくれたら、あたしたちも嬉しいし、」

ノーヴェさんがそんな事を言ってくれる

「家族は多いほうが楽しいッス」

ウェンディさんがそんな事を言ってくれた。そして………

「そうだよね。父さん。ギン姉。ソーガ」

「あぁ、息子がもう一人出来んなぁ、嬉しいやなぁ」

「うん」

「やっと家族になれるな。」

はじめてのあたたかさ、初めての家族。手に入ったはずの温もりを、だけど直ぐに受け入れることが出来なかったのは、やっぱり故郷の事故のこと、どんな形でもいいから踏ん切りを付けたかった。あたたかな温もりに溺れて、普通になってしまう前に………そんな時、兄さんが話してくれた。

「俺もトーマみたいな辛い思いをしたことがある。親父があんなひどい事件を起こして、俺は村の皆が見捨てずにずっと優しくしてくれたことに、悲しみを覚えた。自分も責められるべきなのにって……幼なじみを無くした時だってそうだった。あんな親父がいるからどこか言っちゃったんだって、だけど、今こうしていられるのは、スバル姉と家族になったから、スターやヴィヴィオ達と出会えたから、」

「兄さん。」

兄さんの父親は次元テロを起こしたオルドレイク・ベルリッツだった。だけど兄さんは触れ合うことで救われたんだと思った。そして、兄さんは……

「俺は16になったら親父がなんであんなことをしたのか知りたい。母さんはどんな人なのか知りたい。だから……旅に出るんだ。旅に出て知ることが出来なくっても、それでもいいと思ってる。俺は親父を……母さんを忘れずに生きていこうと。」

「そっか、」

兄さんが旅に出ると聞いて、俺も旅に出て踏ん切りをつけようと思った。スゥちゃんと家族になるためだったら……

でも、旅に出て色んなことが起きた。リリィを助けて、忘れようと思っていたことを思い出され、エクリプスに侵されて、辛い目に合って、兄さんと再会できたけど、それでもスゥちゃんやみんなに迷惑をかけて……俺はもう生きていちゃいけないんだって……

薄れいく意識の中、ぼやけた視界の中、声が聞こえた。

「トーマ！」

きっと今にも泣きそうな顔をしているスゥちゃんの声、

「トーマ」

強い意志を秘めたなのはさんの声、

「貴方は死んではいけないです」

星のような暖かさを感じるスターの声。そして…………

「手を伸ばせ、お前はそんな紛い物の毒に負けるほどの奴か？違うだろ。毒は俺が受け止める。天蠍宮のスコ…………ごふっ」

『ダメ、その体で魔法は…………』

きっとぼろぼろになった体で俺を救おうとしている兄さん。そんな人達の声を聞いたせいなのか、俺は心のなかで思った。

(死にたくない)

そんな時、守ろうと思った少女の声が聞こえた気がした。

『大丈夫だよ。トーマは私が救う』

トーマ09　それはとても温かなもの（後書き）

次回でトーマ救出編の終了です。

ソーガ&トーマ07　二人の思い（前書き）

今回でトーマ救出編の終わりです。この次からはその後の話とオリバナをやる予定です。

ソーガ&トーマ07　二人の思い

リリィはヴァルフラムの医務室から外へと飛び出した。その姿に最初に気がついたのは……

『あれは、リリィ？』

「何だって、というか何の装備もなしに飛び出して大丈夫なのかよ。」

イリスとソーガがリリィの姿を確認したときには、既にトーマの近くまで来ていた。

(私のせいで、死んでいく人たちを見て、ずっと悲しかった。誰かに助けて欲しかった。ずっと苦しかった。そうしてトーマが私の声を聞いてくれた。アイシスが私とトーマを助けてくれた。ソーガが私達のために来てくれた。イリスが自分と同じ境遇だって分かった。)

リリィは涙を流しながらトーマの元へと落ちて行く。

(なのにやっぱりトーマにアイシスに……助けに来てくれたソーガとイリスに、苦しい思い、辛い思いをさせちゃった。周りの人にもたくさん迷惑をかけちゃった。)

リリィとトーマの距離がだんだんと近くなっていった。リリィはゆっくりと手を伸ばした。

『トーマ、私だよ。リリィだよ。答えて銀十字、リアクトプラグ、

シュトロゼック４ｔｈがここにいる。』

『異分子──反───応。脅威───防……御』

ボロボロの銀十字から何百枚のページがトーマを包み込んだ。

『排……除』

そしてトーマの握る銃剣がリリィを切り裂いた。リリィは斬りつけられ、痛い思いをしていた。だけど、諦めてはいなかった。

『排……除』

銀十字が再びリリィを斬りつけようとした。だが、その瞬間、銃剣の刃を一人の少女が受け止めた。

「大丈夫。リリィ。」

「イリス。どうして……」

白い翼を拡げたイリスがゆっくりと微笑んだ。

「だって、友達にこれ以上辛い思いはさせたくない。本当なら私がトーマのこの力をどうにかしたいけど、その役目はリリィだって知ってるから、だから……」

「ありがとう。銀十字、止まって。トーマこっちに来て、トーマ！」

リリィが必死にトーマを呼びかけた。その呼びかけに応えるようにトーマの意識が戻った。

「リリィ？」

「トーマ、ごめんね。私やっと思い出したんだ。」

リリィはトーマを優しく抱きしめた。

「待ってたのは私を助けてくれる人じゃなかった。私の操縦者。リアクター『銀十字』の制御プラグ。『シュトロゼック』の保有者になれる人。こんな運命に巻き込んでごめんなさい。だけど、これ以上トーマを傷つけたりしないから、」

「リリィ」

「トーマを死なせたり、誰のことも殺させたりしないから、一度だけ私を信じて、私がきっとトーマを助けるから」

リリィの強い意志、決意をした表情。それを見たトーマは優しい笑みをした。そしてリリィは微笑みながら、エンゲージスーツ、戦闘防護服に着替えた。

「リアクト・エンゲージ」

リリィがトーマと融合し、そして銀十字を安定させようとした。

「銀十字自動防衛機能遮断。シュトロゼックによる能動制御に切り替え、視覚、聴覚、通常状態に切り替え」

リリィがトーマの視覚と聴覚を通常状態に切り替え、そして……

「ゼロドライブ緊急停止。武装解除ッッ」

その瞬間、トーマの持つ銃剣とリアクト状態を解除した。

「抗体作動。エクリプスのコントロールは私が………」

安定させようとした瞬間、リリィの声が聞こえなくなり、空に浮かんでいたトーマの体がまた落下しようとしていた。

「リリィ、リリィ、リリィ！」

トーマの呼びかけに答えないリリィ、すると落ちようとしたトーマの体をアイシスが支えた。

「大丈夫。トーマ」

「アイ……シス」

「あたしのこと分かる？トーマは大丈夫なの、リリィはどこにいるの？」

トーマの状態を確かめるアイシス。トーマは銀色の腕輪を見ながら言った。

「リリィは俺の中にいる。リリィが助けてくれたんだ。」

「全く黒髪ちゃんやんちゃするな〜」

なのはたちを包み込んだのは白い煙だった。アイシスがトーマが管理局であるなのはたちに捕まると思ったのか、煙幕を焚いていたのだ。

「戦闘状況はこれで終了？」

フェイトがウィングロードに立つスバルに聞いた。

「はい、」

「レスキューの必要は？」

「要救助者あり、トーマと、黒髪の子と、もう一人の女の子の姿は見えませんが、あと……」

スバルが横を見るとそこにはウィングロードに座り込んだソーガの姿があった。

「イリス、助けに行くなら行くで、もっと安全な方法で……」
「傷だらけで魔力もほとんど空っぽの子がいます。」
フェイトとなのはがソーガの姿を見ると、笑みを浮かべた。するとスターがソーガの方へと向かうと……
「あなたはよくそんな風に無茶をやりますね。」
「スター、久しぶり。というか俺がこんな状態なのに絡んでくるなよ。」
「いいじゃないですか、久しぶりなんですから、それよりあの人達は……」
スターがトーマたちを見つめた。トーマ達はシャマルと何かを話しているようだった。

「エクリプスの治療方法は特務の医療技術チームが全力で研究中よ。トーマくんをエクリプス感染から回復した最初の患者にしてみせる」
シャマルがトーマの頭を撫でながら言うと、アイシスが身構えた。

「何ですかそれ？　トーマを治療の人体実験素材にしようって話ですか？」

するとなのはが後ろからアイシスの肩を叩いた。

「まぁまぁ、落ち着いて、黒髪ちゃん。管理局も特務六課もそんな残酷な組織じゃないよ。それにうちのエースの子がそんなの許さないから、それと黒髪ちゃんにも話し聞かせてほしいな。任意同行お願いできる？」

なのはがアイシスに手を差し伸べた。

「任意という名の強制ですよね。それ、」

「任意は任意だよ。いい子で来てくれたら嬉しいけど」

「それに人体実験にしないと言っても、あそこの人達は何なんですか？」

アイシスが指さした方向を見ると、ソーガの近くにアークとティスの姿があった。

「あれって、人体実験の産物じゃないんですか？」

「あの人達はそうじゃないから、」

なのはが苦笑いをしながら言うのであった。

「アーク、ティス。何かお前ら色々と言われてるぞ。」

「かっ、小娘の言葉にいちいち反応なんか出来るか。」

「もとよりこれが我らの戦闘スタイルだ。」

ティスとアークが冷静に言うと、ソーガはアークが背負っている人物に注目した。

「そういえば、ずっとそいつ背負ってたんだっけ、ヴィクサーの野郎に力奪われたらしいけど、」

ソーガがアイリスを心配する中、ティスが微笑みながら言った。

「命に別状はない。」

トーマたちを救出後、ヴァルフラムに戻る時なのはがイリスに話しかけた。

「えっと、イリスちゃんだっけ」

「あ、はい。えっと、高町さんですよね。」

「なのはでいいよ。貴方ってユニゾンデバイスみたいだけど……何だか……人間らしさがあるというか。」

なのはが上手く表現できずにいると、ソーガがなのはに向かって言った。

「なのはさん。イリスのことは………」

「大丈夫だよ。ソーガくん。リリィも自分のことを知ってもらったんだから、私もみんなに知ってもらう。私は……十二宮魔法の一つ処女宮のイリス。十二宮魔法のマスターであるソーガくんと同じマスター権限を持っていて、そして………」

イリスが口ごもるが、勇気を出して言った。

「イリス・ライン。ソーガくんの幼なじみです。」

ソーガ&トーマ07　二人の思い（後書き）

次回、イリスの過去話と言いたいですが、それは其の次の次の話になります。次回はその後の話になります。

ソーガ&トーマ08　戦いの後（前書き）

今回はトーマ救出後の話です。

ソーガ&トーマ08　戦いの後

フッケバイン移動要塞

移動要塞のとある部屋ではカレン、ヴェイロン、ステラ、フォルティスの四人が集まっていた。

「いやー疲れた。疲れた。」

カレンがステラに膝枕をしながらそんな事を言っていた。するとフォルティスが笑顔でこんなことを言っていた。

「今回は長旅でしたね。」

「でもおかげで色んなお宝もゲット出来たからね。『フッケバイン』の新型航行システムのおかげでステラも大分楽になるだろうし、」

「だけどよ。姉貴。いいのか？特務の頭を潰しとかなくって、いくらあの時邪魔が入ったからって、姉貴だったらとどめ刺すぐらいは……」

ヴェイロンが不機嫌そうに言うと、カレンが上機嫌そうに答えた。

「甘々ちゃんだね。ヴェイ。殺したら殺したで、局を無駄に本気にさせかねないし、それにあの時は例の幻想殺しと神機王がいたからね。あの子を殺す時間があったら、まずは神機王の方をどうにかしないとね。」

「そうですね。あの場面で幻想殺しと戦っていたら、カレンでも苦

戦したでしょうし、」

フォルティスが当麻のことを思い出しながらそんな事を言うと、カレンが嬉しそうに言う。

「あの幻想殺しは私達の毒を消しちゃうかもしれないからね。魔導殺しも幻想殺しの前では無力に近いけど……………まぁ、今回はトーマくんの事と、神機王を追い詰める事が出来たからね。」

「神機王もそうだけどよ。あの十二宮使いはいいのか？アイツはかなり手強かったぜ。」

「十二宮使い。名前は確か、ソーガ・ベルリッツだっけ。あの子も別に殺す必要がないわ。あの子は対神機王に必要な人材だしね。」

「そういえば、カレン。ソーガ・ベルリッツで思い出したのですが、彼、十三番目を使ってませんでしたね。神機王を追い詰めた時に使用した魔法には十二番しか使ってなかったようですし、」

「そうね。十三番目は切り札として残しているのか、それともまだ手に入れてないかだけど、」

カレンがふっとあることを思い出した。

「そういえば、もう一個思いだしたけど、それは食事の時にでも話すわ。」

ヴァルフラムの医務室では、フェイトがはやてにトーマたちの経緯を話していた。

「トーマ・アヴェニール少年は遺跡探索旅行中に助けを求める声を検知。助けを呼ぶ声に従って、厳重警備をくぐり抜けて、不法潜入したら女の子を発見。救助した際に職員が発見。危険物処理のプラズマジェットで焼き殺されかけて、その際にディバイダーが起動。ディバイダーによる攻撃で職員全員を気絶させて、現場から逃走後に犯罪者として手配。家出旅行中のやんちゃ娘に助けられ、管理局の追っ手から逃げる内にフッケバインに発見されて拉致、構成員達と接触。その時にエクリプスについて聞いたようです。」

「ソーガ・ベルリッツの方は？」

「ソーガ・ベルリッツ少年はオルドレイクが残した遺産の神機人を追っている内に、遺跡からそう離れていない街でトーマを発見し合流し、その後彼もディバイダーの話を聞いたそうです。その後神機

人との戦闘中にフッケバインの構成員と接触。その後、フッケバインに拉致されたトーマとやんちゃ娘、そして彼と同行していた少女を助けるために移動要塞でフッケバインと戦闘。そして神機王と名乗る者を撃退したようです。」

「あの子もよく無茶をする子やな。トーマと話をしたいんやけど、今は？」

「今はメディカルチェック中です。それにエクリプス症状が落ち着いているとはいえ、再発したら危険です。」

「トーマの状況が落ち着いたら私に伝えて、エクリプスの事、フッケバインの事……少しでも知っておきたい。」

「ああでも………」

「何か？」

薬を飲んだはやてを心配そうにしたフェイト。するとなのはが部屋に入ってきた。

「何かといいますとね。八神司令。お腹刺されているんですよ。あまり無理なさらないほうがいいです。」

「私は歩くロストロギアと呼ばれてるんや。自分の体の自己強化、自己治癒も効いてきたんや。」

「だからって、」

「だからって、無茶しすぎだぞ。はやて」

はやてが声が聞こえた方を見るとそこには当麻とバードウェイ、そしてイリスがいた。

「上条さん。心配してくれるのはありがたいけど、私は司令官やいつまでも寝ていられへん。」

はやてがそう強がって言うと、バードウェイが怪しい笑みを浮かべた。

「上条、この司令官に触って自己治癒を無効化してやれ。」

「ひどいな。あんた。」

「そういえば、当麻。彼女は一体？」

フェイトがバードウェイを見て言うと、なのはも気になっていた。

「当麻さんは確か来られないはずじゃ………」

「あぁと何というか………」

「私はレイヴィニア＝バードウェイ。この馬鹿な上条当麻がフィアンマとの戦闘で死にかけた所を救った黄金系魔術結社「明け色の陽射し」のボス。今回の事件についてはオルドレイク・ベルリッツが関わっている聞いたので、ここまで来ました。」

「いや、嘘だろ。人が地獄の補習を受けている時にこっちの世界の話を聞いて行きたいと駄々こねたんだろ。」

「だが、そのおかげであのピンチを救った。結果的には良かっただろ。」

バードウェイが当麻を簡単に言いくるめた。するとなのはが笑顔で……

「当麻さん。死にかけたってどういうことかな?」

「へっ、えっと、それは………」

「高町空尉。今は仕事中やプライベートの話は後でお願い。レイヴィニア=バードウェイも後でお話を聞きます。」

「分かったわ。では、」

バードウェイと当麻はそのまま医務室を出ていった。するとはやてはイリスの方を見た。

「それで貴方は?」

「は、はい。イリス・ラインです。ソーガくんから八神司令の怪我を治しに行くように言われたのですが………」

「彼の使う十二宮魔法は確か、彼しか使えないんじゃ………」

はやてがそう疑問を浮かべると………イリスがはやてに手をかざした。

「5つの星座。癒しを司る十二宮。宝瓶宮のベル。」

「やっほ～呼んだ？」

イリスの体が光りだすと、そこから一人の少女が現れた。はやてとフェイトはそれを見て驚いていた。

「これは……」

「十二宮魔法？」

「ベルちゃん。八神司令の怪我を治して」

「いいよ。イリスの魔力じゃ完全というわけには行かないけど………」

ベルがはやてのお腹に触れるとはやての傷を少しだけ癒した。

「しばらくすれば傷口も治り、あとも残らないと思います。」

「ありがとうな。それで貴方は一体………」

「私は処女宮のイリス。十二宮のマスター権限を持っています。そして、ソーガくんの幼なじみの体と記憶を共有しています。」

イリスの言葉を聞いて、驚きを隠せなかったはやてとフェイト。なのははというと、

「彼女はちょっと複雑な理由があってね。私もさっき聞いたばっかりだけど、彼女の事は二人にも知って貰おうと思って、ソーガくんからも許可をとってます。」

「分かった。話してもらえるか？」

「はい、あれは7年前…………」

ソーガ&トーマ08　戦いの後（後書き）

次回イリスの過去話です。イリスの過去話は少し長めかもしれません。

イリス０１　決して傷つかない羽　その一（前書き）

今回はイリスの過去話となります。明かされるイリスの過去とは……

イリス０１　決して傷つかない羽　その一

７年目、それはまだスカリエッティとオルドレイクが作戦のために準備をしていたころ、とある世界のとある村に、私はいた。

「ソーガくん。遊ぼう」

「イリス。いいぜ。何して遊ぶ」

その頃はまだ普通の子供だった私達。ソーガくんは何年か前にこの村に預けられていた。年が近いせいか私もソーガくんとよく遊ぶようになった。

「早く来いよ。イリス」

「うん、」

いつも同じ時間にソーガくんを呼んで、同じ時間に家に帰る。私達の一日はそれの繰り返しだった。変わらない日常、変わらない場所。それがずっと続いていくものだと私は思っていた。だけど……そんな時間も思いもある日を境に壊れた。

それは村に研究員の人がやってきたことから始まった。研究員の人は私にあることを言った。

「君には魔導師としての才能がある。魔導師となってこの村のために魔法を悪用する者たちと戦ってくれないか？」

村のためと言われた私は直ぐに答えた。

「私でいいんでしたら……」

それが過ちだったのかもしれない。

研究所に連れていかれた私にはそれつらい日々が続いた。魔法を身につけるために体に特殊な魔力を植えつけるために、激しい痛みを伴う実験が続いた。本当は辛くて逃げ出したかった。けど、これも村のために、ソーガくんのためにと思っていた。

そんなある日の事、研究所に一人の男がやってきた。名はオルドレイク。ソーガくんのお父さんだ。

「彼女が適合者か。」

「はい、適合率１００％。完璧です。ですがまだ幼いため覚醒はまだです」

「そうか、作戦に使えると思ったが、無理か。」

オルドレイクは研究員と話し終えると、私の方を見て、頭を撫でながら言った。

「名は？」

「い、イリス・ラインです。」

「イリスか。君には才能がある。だからその才能を世界のために使ってくれ。」

オルドレイクはそう言いながら研究所のとある一室へ入っていった。そこには何があるか分からなかったけど、きっと凄い実験をしているんだと思っていた。

それから一年が過ぎた。辛い実験の日々も少しだが慣れてきた。そういえばソーガくんに手紙を書いてないなと思った。その事を研究員の人に話したら……

「そうか、じゃあ、後で紙とペンを持ってくるからね。」

研究員の人はすごく優しかった。でも一人だけ違った。それはアナザーという男の人だった。その人は何を考えているか分からず、なんだか怖かった。そして事件は起きた。

『オルドレイク・ベルリッツの次元テロ。管理局機動六課が解決。』
それは本当に突然だった。研究所の人も大騒ぎだった。きっとこの研究所も管理局に突き止められるとなどと言っていた。私は何が何だか分からないでいたのだが、研究員の人が優しい笑顔で言った。
「ごめんね。あなたももう少しでお家に帰れると思うから。」
「うん、お姉さんたちは？」
「私たちはしばらく会えないかもしれない。けど、いつかちゃんと会えるから」
「分かった。ありがとうね。おねえ……」
私がお礼を言いかけた瞬間、お姉さんの体が爆ぜ、お姉さんの血が私の顔に掛かった。
「えっ、」

「ようやく邪魔な奴が死んだか。これでやっとこちらの仕事が出来る。では実験体。君には埋めこまさせてもらうぞ。十二宮を……」

「えっ」

その人はアナザーだった。アナザーは私の髪を乱暴に引っ張り、実験室に連れていかれた。そしてアナザーは私の服を破り、白い宝石を私に埋め込んだ。

「ああああああああああああああああああああああ」

「これで最強の十二宮魔法『処女宮』の完成だ。これを別世界にいる同志と合流すればロストマジックは手に入れたも同然だ。」

アナザーが言っていることが理解できなかった。いや、理解する事自体できなかった。白い宝石を入れられた私は、背中に激しい痛みが襲った。そして痛みが一瞬だけ消えかけた瞬間、私の背中を突き破り二枚の白い翼が生えた。

「あ、ああああ、」

「覚醒完了。さぁ、残りを集めようか。処女宮。」

アナザーがそう言った瞬間、白い翼がアナザーの体を貫いた。

「ごふ、き、貴様私の命令を………」

「あ、あああああああああああああああああああああ」

白い翼は制御することも出来ずに私の周りにある物を全て破壊した。
そして破壊し尽くすと私はどこかへ飛んでいった。

アナザーは傷ついた体でその場から離れようとしていた。
「ごは、ロストマジック。手に負えないほどなんて………」
アナザーは壁に手を付きながら歩いていると、とある一室へ入り込んだ。
「ここは………」
そこには銀色の物体がフラスコの中で浮いていた。そしてアナザーは気がついた。その部屋の異質さに……その部屋はイリスの羽が研究所を破壊し尽くしたはずなのに、全く傷ついていなかった。
「な、何なんだ?」
『いい感じに傷ついているな。まだ不完全の私でも簡単に乗っ取れそうだ。』
「だ、誰だ? だれが………」

『もらうぞ。その体を…………』

銀色の物体はフラスコを突き破り、アナザーの体を乗っ取るのであった。

イリス０２　決して傷つかない羽　その２（前書き）

久しぶりの更新です。イリスの過去編の続きになります。

イリス02　決して傷つかない羽　その2

気がついたら私はどこかの森に来ていた。私はとりあえず誰かに研究所が破壊されたことを伝えなくてはいけないと思い、森を抜けてどこかの村へとたどり着いた時、村の人が私の姿を見て恐怖していた。

「く、来るな。化物」

「化物？私は………」

「人間だって言うのか。嘘をつくな、お前の背中にあるその二枚の羽は何だ。」

私は後ろを恐る恐る見るとそこには大きな白い翼が広がっていた。だけど、少しだけ羽が真赤に染まっていることに気がついた。

「わ、私はば、バケモノじゃ………」

「く、来るなぁぁぁぁぁぁーーーーーー！」

村の人が逃げ出した瞬間、私の羽が勝手に動き出し、その人を潰した。

「こ、殺すつもりは………」

気がつくと他の村人が武器を持ってやってきた。どうやら私は本当に化物になったみたいだ。

「来ないで、これ以上……私は……誰も殺したくない。」

私は急いでその場から逃げ出した。何人かの村人は私のことを追いかけていったけど、翼がその村人たちを勝手に殺していった。

（私は……私は……）

私はもう誰も殺したくないと思い、森の奥深くへ逃げ込み、そこで暮らすようになった。その場所に住むようになってしばらくして私を殺そうとする魔導師の人たちが来たけど、私の羽はそんな人達を殺していき、私の白い羽は真赤に染まっていった。

（お願い。もう誰も来ないで…………こんな力もういらないから……助けて……助けてよ。ソーガくん）

私は何年も前に別れた幼なじみの名前を心の中で呼ぶのであった。

それから数年の月日が流れた。その間にも私を討伐しようとする魔導師とかが来たけど、私は全て殺していき、私の心はもう何も感じなくなってきた。

（もう私は……バケモノでいいよね。ただ人を殺すだけのものに……）

イリスの心が壊れ始めている頃、近くの村で一人の少年がいた。

「ふ〜ん、天使の化物ね」

「えぇ、何年も前に突然現れて、村の者は退治しようとしたのですが全員殺されていったのです。管理局の魔導師の方にも連絡をして

討伐して欲しいとお願いをしたのですが、その魔導師の方は全員……」

「なるほどね。捜し物のついでに寄ってみたら面白そうな話聞けたし、ちょっとその森にでも行ってみますか」

少年が立ち上がり、村人の静止の言葉を無視し、森へと向かっていった。その少年の名前は……ソーガ・ベルリッツ

ソーガは森の中を進みながら、何人かの十二宮魔法を召喚した。

「残りひとつの十二宮魔法はここにあるんだよな。」

ソーガがそう言うと、両隣を歩く双子の少女が答えた。

「うん、そうだよ。残りひとつは処女宮。」

「私たち十二宮魔法の中でソーガ以外にもマスター権限を持ってるの。」

「だが、妙だな。彼女の魔力が少しばかりおかしい。」

突然ソーガの体の中から蒼いコートを着た男が現れて言うと、ソーガは……

「リヴァ。突然出てくるなよ。」

「済まないな。マスター。だが、コレを見よ」

リヴァはそう言って、赤い羽根をソーガに見せた。

「これは？」

「処女宮の羽だが、処女宮の羽は真っ白のはずが、これは真赤に染まっている。それも濡れている。」

「どうやら、血みたいだな。とりあえず、話聞いてみようぜ。」

その時、ソーガは何一つ思っていなかった。まさか幼なじみと死闘を繰り広げることとなるとは………

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9514o/

とある魔術のなのはFORCE　～12の魔法～

2011年11月13日00時03分発行